
Haematophilia Vampire Story 1stage

白菊疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Haematophilia Vampire Story 1
stage

【Nコード】

N1948A

【作者名】

白菊疾風

【あらすじ】

平凡な日常を送っていた血液嗜好症の少年や、偶然居合わせた彼の友人たちを巻き込んで展開される闇の事件。一見信じ難いSFじみたことのようにも思えるが、ほら、あなたの近くにあるあの工場が……。高校生&怪物VS生物兵器&特殊部隊が繰り広げる、壮絶バイオレンスアクションヒーローマンストーリー！

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y 1 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第1話 ～日常～

平成1X年、ある春の朝……。

ひらおかはやて
平丘疾風はいつものように高校へ向かうバスに揺られていた。

バスの窓から鋭角的に差し込んでくるまぶしい朝日に気だるい痛みを感じながら、いつもの席に座る。

隣には幼馴染の鈴谷悠すずやゆうが腰掛けて顔にナチュラルメイクを施している。

もともとメイクなど必要ないくらいに美しい部類に入る顔立ちなのだが、17歳というお年頃のせいなのか、自分をより美しく見せることに余念がない。

そして幼馴染でも理性が危ういほどにタイトでショートなスカートに、胸元強調しまくりのニット。

私服校なので服装は自由だが、、さすがにこれではこれから勉強しに行く服装には見えない。

始発のバスは途中で疾風の友人を何人が乗せるのだが、朝はとにかく眠いので話す気にもならない。

学校には、途中でバスの乗換えをしないとならない。疾風や悠の家は山に囲まれた僻地に建っている。

遊びたい年頃の彼らにとって、家が市街地から遠く離れていることは遊ぶ字時間を否応なしに削られる。

しかし今年大学受験を控えた今年、それも悪くないと思い始めている大人になった彼ら。

いつもの時間に学校にバスが着き、いつもの様にガラス張りの昇降口を通る。

一年前に建てられたばかりの高校なので、エレベーターや最新の設備が整っている。しかも職員室という概念がなく、各教科ごとの「スペース」に先生方が常駐している。今までの高校スタイルを破った新型県立高校。

授業スタイルも大学のようで、毎時間受ける教室もメンバーも違う。

そして今日も授業が始まっていく……………。

春の暖かく眠気を誘う陽気のなか、毎日が過ぎていく……………。

・・・ように思えた・・・・・・・・。

そう、この日までは・・・・・・・・。

放課後、生徒会役員に属している彼は生徒会室に向かう。

途中で浅木美夜あさきみよとすれ違い、互いに軽く会釈する。

美夜は後輩で2年生。細身で長身、綺麗な黒髪のセミロング。顔立ちも、暗い印象を受けるがなかなかの美顔。

去年の暮れから新年明けまで、短い時間だったが疾風と恋愛に堕ちていた。

今はお互いに特別な感情を抱いていない。しかし、提供者という特別な立場にある。

・・・・・・・・そう、疾風はヘマトフィリア（血液嗜好症）なのである。

しかも自分の血では満足できない特殊なケースである。血液に・・・
同年代の女性の生き血に激しく依存していた。

かといって精神的にアブナイ人ではない。それを除けば頼れるいい

お兄さんなのだ。もちろんこのことは、家族は知らない。

よく勘違いされるが、ヴァンパイアの類ではない。生まれつき鼻や勘が働くが、日光を浴びても灰にはならない。

ニンニクは好きではないけれど食べられるし、銀の装飾品も何も感じない。さすがに心臓に杭を討たれたら絶命決定だが。

力や格闘センスはあるものの、ヴァンパイアほどでもないし、人間が修練すれば得られる範囲の強さだった。

「遅くなりましたあゝ、すみませえくん。」

気の抜けた挨拶を引っさげて生徒会室に入ると、他の生徒会役員が生徒総会の資料作りに追われていた。

「おう、やっとこさ来たか！庶務委員の活動計画がまだあがってないんだよね。わりいけど、庶務委員長からもらってきてくれないか？」

生徒会会長の横浜が言う。

「わかった。行ってくる。」

まさか入った途端に踵を返すことになるとは・・・などと心に留めながら3階から2階の庶務委員長へ向かった。

委員長のいる20E教室へ入室。庶務委員長とはクラスメイトだ。

「失礼します、活動予定表を預かりに来ました。」

委員長は何やら必死に書き物を・・・もとい予定表を書いていた。ちなみに締め切りは2日前。

「ごつめえくん、庶務委員集まり悪くて話し合いできなかったのお〜！今書いているから待ってえ〜！」

「ああ、ゆつくり書いていいよ。俺もその間は生徒会の仕事しなくてすむから。」

なんとも生徒会役員にあるまじき発言。こんなんでこの学校は大丈夫なのだろうか。

窓際の手すりの腰を掛ける。書き終わるまでのんびり外を眺めていた。

昇降口にバスが停まっているのが見え、バス帰宅の生徒たちはそれぞれ軽く別れのジョークを飛ばしあっている。

その中に見知った顔の少女を見つけ、目でRock on.

視線に気づいたのか、少女が振り返り疾風の顔を確認すると、100万ドルの笑顔で大きく両手を振ってよこす。

「せんぱあい！さようならあー！」

「ああ！Hなおじさんに捕まらないように帰りなさいねー！」

「うん、じゃあね！」

彼女とその他大勢を載せたバスがくたびれたエンジン音を高めながら公道の流れを割っていく。

彼女は真下菜緒ましたなほ。後輩の1年生。提供者の一人。屈託のない笑顔と明るい性格が魅力だ。

菜緒の兄（別の学校）と疾風は友人であり、菜緒も疾風の妹と友人である。

先月、初めて菜緒と対面したときに話の馬が合い、結構複雑な話題でも話し合えた。

勇気を出して血の話をしてみると、考える暇もなく即答で提供者になってくれる意を表した。もちろん誰にも秘密。

「……………よし、終わったよお。」

「お疲れさんです、じゃあ、頂いていきますよ。」

「ごめんね？待たせちゃって……………」

「いやいや、気にすんな。じゃあ失礼いたします。」

音を立てないように20E教室の戸を閉めて生徒会室に向かって歩き出した。

春の陽気をさらって、東の空が明るい闇に抱かれている。

学校から200メートルほど離れた所に、黒い車体にスモークシールを貼った車が停まった。

ベントツ、しかも最高クラスのセダンだった。

学校は恐ろしく巨大で、尚且つ周りには建造物が存在しないので、離れていても良く見える。

車の中には3人の中年男性がのっていた。いずれも黒いサングラスをしている。

「やはりこのあたりか……。」

「毎回ここで臭うのです。もうあの建物しかありません。」

「確定だな。日を改めて出直そう。一応付けておく。」

車がゆっくりと東の闇に消えてゆく。

生徒会室に着いた疾風は、パソコンに打ち込む仕事をしている副会長の吾妻あづまに予定表を渡す。

「やっと来たの、遅かったじゃん？」

「取りに行ったときはまだできてなくてね。」

早く仕事を終わらせて帰りたいのか、怒濤の勢いでキーボードを叩いていく。

他の役員の姿が見当たらないのは、仕事を終わらせもう帰ったのだろう。

あつという間に打ち込みを終えた吾妻は、うんと背伸びをしながらあくびをする。

「じゃあ俺はもう帰る。またな、平丘。」

「またね。」

吾妻は生徒会室を出て行った。

「さて、少し勉強していくかな。」

315教室に荷物を取りに戻ると、石森進介いしもりしんすけが暇をもてあそんでいた。

進介とは高校に入ってから知り合いになったのだが、サークル活動などで一緒になる機会が多く、自然と仲良くなった。中性的な顔立ちをしており、女装でもさせてみたら面白そうである。

また、電子機器の扱いに長けており、本人曰く「健全なヲタク」だそうだ。

「生徒会終わった？」

「うん、やっと資料完成の目処がたったかな。」

「おつかれさん。あ、これ、聞いたがってたTM Revolut
ionのWhite Breath。」

「ん〜サンキュウ！よく見つけたね！」

などくだらない話をだらだらと・・・すっかり勉強のことなど忘れていた疾風。

20分ほど話し込んで時計を見ると、最終バスの時間が迫っていた。もちろんこれを逃せば、帰宅不可能である。

「そろそろ帰らない？」

「こんな時間になってたか、帰る。」

荷物を取りながら廊下・階段・昇降口を話しながら歩いて行く。

最終バスも菜緒を見送った昇降口から出発する。

バスは3台出て、それぞれ違う駅に向かう。方向が違っているので、こいで進介とお別れ。

二人は同時に「またね」と言いそれぞれのバスに乗り込んだ。

バスに乗って悠を見つめる。ちょうど二人掛けの椅子をキープしていたので、これはラッキーと心で呟く。

「お嬢さん、お隣に失礼してもよろしいでしょうか？」

「あら素敵なお方！どうぞお掛けくださいな！」

などとふざけあっているうちに、バスが動き出す。

悠には彼氏がいる。これだけ美人で性格も良いのだから当たり前なのだが、彼氏もちの女性に公然と髪を撫でたり肩を抱いたり、手を取ったりできるのは幼馴染の特権か、などと黒い笑いを腹に飼う。

もちろん幼馴染で恋に落ちることはあるが、この場合の二人は性別を超えた関係にある。兄妹みたいなものか。

今日有った事、家に帰ってからしたいこと等をはなしているうちに、乗り換えポイントに着いた。

何人かバスから降りる。そして30分後に出るバスをお喋りしながら待つ……のだが、今日はそうもいかなかった。

学校を出たあたりから感じる「臭い」が気になって仕方がない。

それは、湿った洞窟の臭い。このバス停は温泉街にある駅にくっついているのだが、温泉のそれとは違う。

上の空で聞き流していることに気づかれたのか、悠が急に頬を膨らます。

「んもう！疾風、ちゃんと聞いてよぉ〜！そんなに私の話、つまらない？」

聞いてないのだから面白いもつまらないも無いだろうっ・・・なんて口が裂けても言えない。

「ああ、すまない。それよりさ、変な臭いしないか？」

「話逸らしやがったなあ・・・。別に？しないけど。」

「そっか、ならいいや。」

と言いつつもずっと臭いの出所を探る。嗅覚が異常に優れているのだ。

少し硫黄の匂いが混じるが、自分の後方から「あの」匂いが漂ってくることに確信を得た。

だからと言って今はどうすることもできず、帰りのバスに乗り込んだ。

「終点、岸の下あ〜、岸の下あ〜。」

いつの間にか眠っていたのだろう、疾風を乗せたバスは終点に着いていた。

もともと終点で降りるので、寝過ごすことはありえない。

「ね、着いたよ、起きてよお。」

悠に揺り動かされて目を覚ます。

「ん、んん、おはやぶ。」

「フザケタ挨拶してんじゃないわよ。」

「降りるか……。」

「それ以外することないでしょ。」

「じゃあ降りよう……いや、是非降りねば。」

「寝ぼけてんの？」

「降りず・降りるとき・降りる・降ります・降りれば・降りろ、活用形現代版オリジナル風味。」

「………寝ぼけてるわね。起こしてあげる……。」

全身に「危険！」信号が伝達され、ミサイルのような勢いで立ち上がった。

あれ以上ふざけていたら確実に身長が伸びてしまう……タンゴブで。

「素直に起きればいいのに。」

「俺ぐらいの男の子は難しい年頃なの。」

「はいはい。」

ぐだぐだしながらバスを降りた。

真っ暗な田舎のバス停、悠の家はここから少し離れた所にあるので、いつも親が車で迎えに来るまで、疾風と一緒に待っている。

真っ暗、本当に真っ暗な闇の中。街灯一つ無い。

疾風は暗闇でもはっきり見えるのだが、普通の、しかも女の子の悠にとっては凄く怖いだろう。

この時だけは気丈な悠も大人しくなる。

隣に立って、黙って疾風の左手を掴む悠。ずっと下を向いている。その仕草がたまらなく可愛い。

身長は疾風より少し大きい悠なのだが、このときは毎回、小さく見えてしまう。

森の中から鳥が羽ばたく音が聞こえる。悠はますます力を込めて手を握る。

彼女ではない女の子にでも、こんなことされたら男は嬉しいもので

ある。

毎回こうだとしても、たとえ幼馴染で慣れていたとしても、理性がアヤウイ疾風。

レッドゾーンまで針が振り切れている。これで目線でも合おうものなら、間違いなく彼女に溺れてしまっただろう。

こんな生活、身が持たない・・・と呟きそうになり、あわてて口を紡ぐ。

その数秒後、ヘッドライトが近づいてくるのが分かった。音から判断しても悠の親の車である。

やがて彼らの目の前に駐車し、助手席側のガラスが開いた。

「いつもありがとね！」

と、悠のお母さん。幼馴染と言うこともあって、疾風なら間違いを犯さないだろうと絶大な信頼をおいている。

本人の本音を知ったら、きっと驚きで気絶するに違いない。

「では、失礼します。」

「またね、疾風え。」

「うん、、、バイバイ。」

車がクラクションとともに走り出す。

名残惜しく、左手の悠の体温を握り締めながら、帰宅する疾風。

今再び、あの匂いが漂っていることすら忘れていくようで……

「ただいま。」

誰もいない家に足を踏み入れる。両親は仕事が多忙で家には帰れない。

祖父母と妹2人は程近いもう一つの家に住んでいる。

すばやくシャワーを浴びる。

冷蔵庫から野菜とササミを取り出し、簡単な夕食を作る。長年一人暮らしのような、両親育児放置プレイ状態。

よくグレないで育ったものだ。

一人でテラスに出て、食事始める。星が綺麗だった。いつの間にか軒下に住み着いた野良猫を口笛を吹いて呼ぶ。

すっかりなついたもので、手渡しても食べ物を食べるようになった。

そして疾風が食べ終わるまで隣に座って星を眺めるのだ。

「最近は暖かくなってきましたね。すごし易いでしょっ？」
と、猫に話しかける。猫はめんどくさそうにあくびをする。

「そうですね、それはよかったです。家の軒下なら、いつまでも使っていていいですからね。」

傍から見たら、黒猫に一方的に話しかけているアブナイお兄さんである。

いや、実際危ないのかも知れない。

星を眺めて3時間がたったころ、疾風はようやく異変に気づいた。
あの臭いがする！

かなり近くで！やはり今回も背後から漂ってきている。猫も気づいたのか、息を荒げ、牙を剥き、臨戦態勢ど真ん中。

猫がこんな反応を示すのであれば、臭いの正体は生き物であるに違いないと確信した。

何のために自分の近くににいるのか、追ってくるのかは、てんで検討がつかないが、好奇心からか正体を見てみたい。

テラスの手摺と隣家の壁を利用して、手摺 壁 テラスの屋根へと三角跳びをした。

うまく屋根に上れたのはいいものの、その瞬間の衝撃で臭いの元が一気に空中へ飛び出した。

そして山のほうへ飛んでいったのである。

「………飛んだ!？」

呆然と立ち尽くす。黒い小さな何かが、不恰好にジグザグに飛び、闇に消えた。

「はあ？コウモリ？」

別にこの地区ではコウモリを全然見かけないわけではないが、なぜコウモリが自分をつけているのか分からない。

時刻は2時を回っている。いつも4時に寝て6時に起きている彼にとって、まだまだ活動時間だ。

ここ数時間ずっと考え込んでいる疾風

そんな時、ふと玄関のチャイムが鳴った。

こんな深夜に来る人は……宅配便？いやいや有り得ない。などと心で思う。

一応用心して、電動エアガンを持っていく。(本当はこうゆうことに使っちゃだめ)

3重の鍵を開錠しながらお約束の問いかけ「どちら様でしょうか？」

「私、平丘ゆき。」

「ああ、ゆきちゃんか。どうぞお入りください。」

平丘ゆき（ひらおかゆき）疾風の同い年の従姉妹。かなり評判の美人4姉妹の末っ子だ。

スポーツが得意で、運動神経抜群。174センチというモデル体系。しかし教科書を開くと必ず可愛い寝顔を見せてしまうほど、お勉強とは仲良しという困ったチャン。

疾風より遙かに長身。ちなみに疾風は160センチ85キロ（！）しかし鍛え上げられた筋肉の上に薄い鎧のようにつけた脂肪がどこか健康的ですらある。プロレスラーのよう。

「寮生活に疲れて、逃げてきちゃった」

「あなたは週に一度は寮生活に疲れちゃうでしょ!？」

「あははあ、だって門限早いし、好き勝手できないし。」

「ああ、なるほど。だから毎週俺の家で好き勝手に………
つておい！」

「怒らない怒らない。じゃあ、シャワー借りるね？」

と言いつつ、ゆきは風呂へ向かった。

平丘家には、たびたびこうした女性の訪問者が訪れてくる。

大半は家出した女友達か発情期のプレイメイトである。

疾風が特別に顔や性格が良いわけではないが、いつでも都合がつき、しかも家でやりたい放題できるので、なかなか夜の照明が落ちることはない。

疾風も、体が手に入るのでまんざらでもない。やはり若い男子だ。

どうせ風呂上りに夜食を要求するだろういつものパターンを想定し、リゾットを煮始める。

それと、ベッドに枕をもう一つ……。

ゆきがシャワーからあがるのを待っていると、進介からメールが来た。

「G a c k tの新曲、欲しい？欲しいなら明日持っていくよ？」

ああ、欲しいさ。聞きたいさ。などとメールにうっている途中、重大な事実に向直した。

「新曲発売って……6日後のはず……？？」

まさか進介が、音楽会社のコンピューターに忍び込んでお持ち帰りしたとは誰も思わないだろう。

なんだか考えるのが怖くなったので、疾風君思考停止。シャワーからあがるゆきを待った。

5分後、ゆきがパジャマ（疾風の）を着て頭をタオルで拭きながらリビングに入ってきた。

「ああ良い湯じゃった。」

「あなたは爺か？」

「いやいや、うら若き乙女よ？」

「じゃあ、言葉遣いに気をつけなさい。」

「はいはい。」

「はい、は一回。」

「はあ〜い。」

「はい、は短く！」

「はい！」

「よろしい。」飯、食べるよね？」

「さっすが疾風！分かってるう〜！」

「17年付き合えば、イヤでも分かります……。。」

実は同じ日に同じ病院で産まれたのだ。

リゾットをテーブルに差出し、軽いスティックサラダと赤ワインも机に置く。

「あらあら、私を酔わせてどうするつもり？」

「・・・いただきます。」

「いいわ、お礼にどうぞ。」

疾風の下半身が一気に加速する。感づかれないように、食事中も楽しい会話を心がけた。

ゆきが一気にワインを飲み干すと、すかさずグラスの5分の2ほどついで入れる。

別に酔わなくても体は提供してくれるだろうが、酒に弱い疾風に毎週酒を送ってくる父親がいるので、賞味期限切れを迎えるお酒がもつたいないのだ。しかしどう見たって未成年の飲酒。

「美味しかったあゝ、ご馳走様。」

「お粗末さまです。」

「ベッド、行きましょ？」

下半身は最大稼動状態。疾風のは至って普通のサイズだが、今や小さなティラノサウルス。

ここでも平静を装い、

「もう少し食休みしないと。」

などと大人ぶってみせる。しかしすっかりお見通しのようで、ゆきもイタズラに艶っぽい声を出す。

「あら・・・私はいいのよ？うふふ、今すぐにも・・・ね？」

「あと5分休もう。」

「あらあら、無理しなくてもいいのに。」

「ゆきの体を考えて言っているんです！」

「はいはい、分かったわよお。」

しかし、5分など早いもの。待ち望んだ時間。

「・・・行くか・・・。」

「・・・うん。」

いざとなると恥ずかしがる二人、まだまだ若い。

リビングの電気を消して寝室へ向かう。

二つ並べられている枕を見てゆきが言う。

「あらあら、用意がいいのね？」

「いつもこうじゃん。なんだよ今更・・・。」

ゆきとは7回程寝たことがある。幼いときにする添い寝とは別の「寝る」だ。

「さあ、寝よう・・・いいんだよね？」

なんとも野暮な質問である。

「あのね・・・良くなかったらここままでこないから！」

と、ふざけ半分に怒ったゆきを押し倒し、耳に噛付く。耳朶を口に含み、舌で愛撫する。

さっきまでの威勢はどこへ消えたのか、息を荒げて声を出さないように歯を食いしばっている。

愛撫の対象が首筋や鎖骨へ移ると、閉じた歯が徐々に開け、次第に喘ぎ声へと変わっていった。

シーツを掴むゆきの手に力が入る。

疾風が電気を消し、全てが一瞬にして闇に包まれる。

その先の光景は、誰にも分からない・・・ただ、音と感触だけが生きる世界へ。

従兄妹など関係のない定義に過ぎず、若い二人の前では何の意味も持たない。

2 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第2話 〈岐路〉

「ねむい……。」

朝の6時。そろそろ起きないと学校に間に合わない時間だ。

結局2時間眠れたのだが、まだ少し眠り足りない。

先に起きたのだろうか、ゆきの姿はない。とりあえず洗面所へ行って顔を洗おうと、寝室のドアに手を掛けた瞬間。

ガチャ……

セーラー服のゆきが入ってきた。

「あ、おはよ。今起こしに来たんだ。」

「おはよ……もう着替えてんの？」

「だって、始発逃したら遅刻しちゃうじゃん？」

「まあ、田舎だからな。」

お互いの学校まで20キロは離れている。地元にも高校はあるが、あそこは犯罪者予備校のようなもので、ヤクザさんかクスリやタバ

コ、お酒がないとやっていけない人達しかいない。

バタートーストにレタスサラダをつまんだ後、昨日の不審な出来事に用心して10本程のダガーや折りたたみナイフを携帯した。

二人は早々にバス停に向かい、朝日を見つめながらバスを待った。

敢えて夜のことについて話さないのは、二人が大人になった証拠。

始発のバス停に5人ほど集まってきた。最後に悠が車で登場。一緒にいる疾風とゆきを見て、何やら感づいた様子。

意味ありげなウインク一発。悠は疾風の全てを知っている。ヘマトフィリアのことも、家庭のことも。

程なくしてバスが到着。いつものように悠の隣に座る。ゆきは一人掛けの椅子に大人しく腰掛けている。

「おはよ、ちゃんと避妊した？」

なんとも朝に相応しいご挨拶。

「おはよう、あのねえ、朝つてのは爽やかじゃないといけないんですよ。」

「冗談よ冗談！今日もバスで寝るんでしょ？」

「うん、着いたら起こして。」

「あれ？人に物を頼むときは・・・？何ていうんでしたっけ？」

悠がイタズラっぽく笑いかける。朝日に照らされてとても綺麗だ・
・なんて、恥ずかしくて言えない。

「起こして……ください……。」

「ん？よく聞こえないよお？」

「起こしてください！どう？これで満足？」

「よし、起こしてやろう。」

屈辱。しかし、即座に疾風は意識がとんだ……。

「起きて、乗り換えだよ？」

悠が揺り動かす。

「ん、起きた。」

「よしよし、今日はすぐに起きてえらいねえ〜。」

子供を褒めるように頭を撫でる。

これも屈辱。

「乗り換えたらまた寝るから、起こして。」

「はいよ。」

遠くからゆきの声が聞こえる。

「バイバイ疾風！ありがとね！悠ちゃん、しっかり面倒見てあげてね！」

こっちも二人で手を振る。

乗り換えのバスに乗った途端、疾風は宣言通り即眠した。

8時12分、学校に到着。まだ頭は睡眠状態まっしぐら。

大抵、学生の頭と言うのは3時限めまで眠っているようなものだ。

先生方はどうもそれを理解していないらしく、1時限目からフルスピードで授業を展開する。

普通より3倍速い赤いお兄さんじゃないと、あの朝の授業には付いていけないだろう。

何の変哲もなく、午前中の講義が終了。ようやく頭が冴えてきた時、重大なミスに気づいた！

「しまった・・・弁当作るの忘れた・・・！おおおおお！」

大げさな疾風。

「んなもん、下で買ってくればいいじゃない？」

と冷静な皆川君。彼は特に仲のいいランチタイムフレンド。

「俺はあの人でゴミゴミした販売スペースが嫌いなの！」

「じゃあ諦めろよ、昼飯。」

「仕方ない・・・非常食で補うか。」

「そんなもん持ち歩いてんの？で、何なの？」

横から吉村が言う。

「カロリーメイト！」

「へえ〜・・・。」

さして興味もなさそうな二人。

各々の食事が進み、食後のグータラタイムが始まる。学生はこの時間落ち着く。

吾妻が唐突に切り出した。

「そう言えばさ、潰れたまんまだった巨大な部品工場あったじゃん

「あそこ、もう一年も前に買収されたらしいよ。」

学生にはどうでもいい話。正直何の興味もわかない一同。

「ふうくん、で？」

「で？って、それだけ。」

「つまんねえ……オチなしかよ。」

が、いきなり疾風の鼓動が高鳴った。

「?????」

自分の体に何が起きたか理解できず、そのまま収まるのを待った。

そしてすぐに激しい「渴き」が襲ってきた。血を求める渴きである。

今までにこんなとはなかった。徐々に渴いていくならまだしも、急に渴くなんてことは初めてなのだ。

頭の中で、白い靄が渦をまき、平衡感覚を鈍らせる。

「おい、平丘？」

「どっした？」

「いや、なんでもない……。」

そついい残して教室を後にした。屋上へ進み、ベンチに身を投げ出す。

「ヤバイ・・・なんだこれ・・・。。。」

昼休みが終わるまであと20分はある。申し訳ないが菜緒に協力してもらおうしかない。

彼の体が女性の血液を渴望している。

彼女の携帯にかける。程なくして明るい声で菜緒が出た。

「もしもしせんぱあい？どおしたのお？」

電話口の奥から、彼氏？だの、生徒会の先輩？だのと冷やかしの声が聞こえてくる。

が、この際一切無視。

しょっちゅう一緒にいるので、変に勘違いされてしまう。

本人曰く、変な虫が付かなくていいとのこと。

「ごめん、今すぐもらえないかな？」

「うん、いいけど・・・声おかしくない？」

「おかしい、ってゆうかいろいろおかしいんだ。」

「分かった、すぐ行く！」

通話終了の音が聞こえる。よかったあ……とひとりで呟いた。

幸いなことに、屋上には誰もいなかった。

1分ほどして、菜緒が屋上に上がってきた。

「どおしたのお？ 顔色悪いよお？」

「いきなり渴いてきてさ、ごめん、もらうよ？」

「はい。」

上着を脱ぎ捨て、上半身下着姿になる菜緒。しかし疾風の頭の中には血のことしかない。

いつも携帯しているメデイカルボックスからT字カミソリの替刃に消毒液を垂らし、切る部分にも消毒をする。

慣れたもので、あっという間に薄く切られた傷口から血がにじみ出てくる。

その血を飲む………と言うより舐める。渴きのサイクルは早い、量は少量でいいのだ。

毎回のことだが、罪悪感に包まれる疾風。女の子に血を提供してもらわないと平静を保てないのは、本人も提供者も理解しているが、女性の肌を傷つけないといけないことに変わりはない。

傷口を見て、一瞬迷う疾風。このまま、傷つけ続けなといけないのか……。

しかし結局は血の誘惑と拘束に逆らえずに、赤い紅い闇に飲まれていく。

しばらく、といっても5分程度だろうか。十分に血を舐め終わった疾風は、その味をかみしめるように、ゆっくりと息を吐き出した。頭の中が白く渦巻き明るい霞に体を預けるような気分だ。

菜緒の前髪をかきあげ、おでこに優しくキスをする。菜緒には彼氏がいるが満更でもない様子。

「ありがと……助かった。今度何か美味しいものでもおごるね？」

「うん、楽しみにしてるよ。」

もう一度傷口を消毒し、絆創膏を貼る。予備にもう一枚手渡す。

「じゃ、教室もどるね。次体育なんだ。」

「本当にサンキュウね。バイバイ。」

菜緒が階段を下りていく。見送る疾風。

「さこと……。」

ひとりで呟いて教室に戻り、生物の講義の用意をする。

午後の授業が始まる……。

キーンコーンカーンコーン・・・今日の学校生活はこれでおしま
い。

「ふあゝあ、やっと終わったか・・・。」

疾風の隣で矢作が大あくびをかます。なんともだらしない。

「世界史・・・眠い・・・もうダメ。」

疾風が情けない声を出す。

「しつかりしろ！今日はこれで全て終わりだ！It is all
for today!」

「あ？今日はこれでおわりだったっけか？」

「本格的にしつかりしろ！お前の大好きな放課後だぜ？」

「ううゝん・・・起きる。」

ようやく机から体を起こして荷物をまとめる。帰りのショートホー
ムルームが行われる305教室に向かう。

担任が来てダラダラと連絡事項を述べて配布物をいつものように配
っている。

正直、学生はホームルームの話など聞いちゃいないのだ。

「起立・・・礼。」

学級委員長のこの一言で高校生は自由になれる。部活へ行くもの、遊びに行くもの、愛を語らうもの、それぞれの活動の時間だ。疾風は所属しているJRCへ顔を出す。ベルマークなどを集めたりする委員会だ。

「お、みんな集まってるじゃん。」

「今日は仕分けだからね、時間かかるよ？」

「それじゃあみなさん頑張りませう。」

「作業開始！」

ベルマークを切り取ったり、点数別に仕切られた容器に分けたり、各々が黙々と活動が続けている。

メンバーはほとんどが疾風の知り合いで、悠・進介・菜緒・美夜・いつも美夜と一緒にいる相原諒子・あいはらりょうこ疾風と同級生の狩崎輝がかりさきあきらいる。ちなみに女性。

諒子は小柄で細身、幼い愛らしさを残した顔つきで、とても活発な元気娘。

輝は長身でかなりの細身。蹴れば折れてしまうのではないかと言うほど細い。身長に似合わず、幼い顔立ちで、そのアンバランスがなかなか・・・。

作業は2時間にも及び、ようやく仕分けが終了した。

「お疲れ様でした。あとは先生に持っていくだけだね。」

菜緒が背伸びをしなが言った。

「切りくずいっぱい出しちゃいましたね・・・掃除していかないと
いけませんね。」

「みんなで掃除して帰ろうよ。もう教室貸してもらえなくなっちゃ
うもん。」

美夜に続いて諒子が言い、掃除用具入れに向かう。

「それじゃ、教室の荷物持って来て、一回ここに集まってから掃除
しよ？それなら直で帰れるよ。」

輝の提案でみんなそれぞれの教室に荷物を取り戻る。

疾風はあらかじめ持ってきていたので、一人で掃除を始める。

人影を失った校舎はひどく広く、恐怖に感じられ、男の疾風でも身
震いした。

そんなとき、「あの臭い」が段々と、急速に近づいてくるのが分か
った。

頭にコウモリが浮かび、ベルトのホルスターに付けていたダガーに

無意識に手が伸びる。

「来る……！」

身構えた疾風の前のドアに、いきなり長身の男が現れた。

真っ白く……いや寧ろ青白くやせ細った顔に大きく見開いた目。歳は40程だろうか。

中東系と西欧系の間のような顔つきをしている。

午後7時の学校に現れる幽霊にはいささか現実味がない。

「なにか、御用でしょうか？」

内心ビビリまくりの疾風。しかし怪しい人だからといっていきなり失態を働くわけにはいかない。

「君かぁ……。」

電子的な声で口を開く。声のトーンが違う男性が二人で話しているような声だ。

疾風は不気味に感じながらも「何がでしょうか？」と答える。

「臭い、気づいただろ？」

「ええ、それが何か？」

「欲しいんだよね・・・君が・・・その体・・・。」

一瞬にして身震い。おひげジヨリジヨリのオカマさんに接吻かまされるよりキワドイ。

残念ながら疾風には同性愛者ではない。

「男好きな男友達ならいますから、紹介しましょうか？」

友達を売る疾風。ヒドイ。

「君じゃなきゃ・・・ダメなんだよね・・・。」

そう言って一歩前に踏み出した。

本格的に臨戦態勢の疾風。背後でダガーを握る手に、力が入る。いつでも相手の喉元と額に飛ばせる距離である。

「どなたですか？」

「俺・・・？俺だよ、俺・・・。」

「クスリでもやってんですか？」

「クスリ・・・今はやってない・・・よ。とにかく君が・・・必要なんだよね。」

「どうしてです？」

「どうでもいい……から……一緒に来て？臭いが分かるってことは……君もなんだよね……。」

そっいつて懐からベレッタM9を抜き出す。アメリカの軍で制式採用されている拳銃だ。

モデルガンやエアガンが大好きな疾風は一瞬で見分けが付いた。

「本物だ……なんで……？」

「説明は後……こっちおいで……。」

5メートルほど離れてはいるが、照準はしっかり疾風の眉間に向かっている。

男がまた一步踏み出したとき、遠くから人の話し声が聞こえてきた。

進介達だ。荷物を取って戻ってきたのだろう。この状況はマズイ。

男は素早く教室に入り、ベレッタを疾風に向けながら隣に立った。

進介達が教室に入ってくる。ありえない光景を見て、とたんに顔色が青ざめる。

女の子達が悲鳴を上げそうになると、男は言った。

「おつと……五月蠅くされては……困るんだ……。このお兄ちゃんの……頭……跳ぶよ？」

黙り込む一同。進介がすぐに口を開く。

「おい、平丘、なに冗談かましてんの？」

と言いつつ本人の顔は引きつっている。

「どうやら、マジっぽい。理由はわかんないけど。」

「すぐに教えてやるよ・・・めんどくせえ・・・見られちゃった・・・か。全員・・・何気ないふりして・・・校門を出る・・・その車に・・・乗るんだ・・・死にたくなければ・・・。」

状況を理解できないでいる一同。

「おっと・・・携帯電話は・・・預かるぜ・・・。」

全員の携帯を受け取りながら、一団は男を最後尾にして歩き出した。教員は何の異常も感じてない。

もともと土足の学校なので、そのまま大型の軍用ジープに乗り込ませられる。運転手があらかじめ乗っていた。

男は助手席に乗り込むと直ぐに後ろを向き、ベレッタを突き出す。

「騒ぐなよ・・・？・・・すぐに着くからな・・・。」

誰も喋らない。ただ、女の子は全員震えている。あたりまえだろう。

前の座席に無線の様なものが鳴っている。男は時折前を向いては何やら会話をしていた。

しかしベレッタの銃口は依然としてこちらを向いたまま。下手に反撃して失敗したときのリスクは大きい。

大人しく座っているしかなかったが、無線で会話している隙を見計らい、進介に折りたたみナイフを渡した。

目で合図し合い、靴の内側の隙間にねじ込んだ。

車は暗闇の工場地帯へと消えていく……。

3 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第3話 く異形く

「ほら、降りろ。」

車が止まった先は、学校から程近い工場地帯の一角。何故か周りには隣接する工場がない。

勝ち構えていた門番のような人に小突かれながら全員工場の中へ連れて行かれる。

「ここは……?」

輝が独り言のように呟く。男が答える。あたりは真っ暗でよく見えない。

「ただの……工場……。そう……。工場だよ。」

「何の工場ですか?」

恐怖混じりに悠が聞く。

「今から……見えるよ……。」

そう言って、電子制御されている大きな鉄の扉の前に止まる。

3メートル四方はある大きな扉だった。

門番が赤いカードキーと青いカードキーを取り出し、男に手渡すと、扉の左右二手に別れた。

「3、2、1、開錠。」

二人同時にカードリーダーへ差し込み、ロックを外す。

ガシャン！グググググググ……ガチン！

大きな音を立てて巨大な扉が開いた。途端にまぶしい光に包まれる。暗闇に馴れていたせいか、一同の目が痛んだ。

始めは何も視認できずにいたが、徐々に目の前の凄惨な光景に気づく。

「うわっ……何これ……、うう……、うええええ……！」

堪らずに菜緒が嘔吐する。悠や輝は手を口にあてがってなんとかこらえている。

菜緒の両脇に屈んで、美夜と諒子が菜緒の背中を摩りながら辺りを見回していた。

「これは……!?!」

「なんなのよ……。」

「人……?」

「は……半分しかないのに……うう！」

ついには輝まで吐き出した。

進介と疾風に至っては、ポカーンと口を開けたまま、アホ面で辺りを見回している。

巨大な工場の中には、白衣を着た研究員らしき人間が200人ほどがおり、せわしなく動いていた。

両面巨大なガラス張りで、培養液に浸けられた人体らしきものが数え切れないほど並んでいる。

巨大な試験管の中で人間が飼われているように見えないこともない。

まるでバイオハザードの生物兵器製造施設のようだった。

培養液の中の人間も尋常ではなかった。体の一部が足りないもの、逆に多いもの、異常に巨大な背丈を持つもの、長い犬歯と永い爪を持つもの……様々だ。

「念のため、手錠を施す。」

門番がそう言って、後ろに組んだ腕を施錠する。

「社長のところへ連れて行け。」

研究員にそう命じて、男と門番はどこかへ行ってしまった。

その時に男から、疾風は額に赤いシールを貼られる。なんだこれ？などと聞いても答えてくれそうにないので、黙って研究員に従った。

重い扉を幾つも通過し、「社長」のところへ到着した。

「失礼します。」

研究員が2度ノックをして扉を開ける。

「確保いたしました。健康で無傷です。」

「ご苦勞、下がってよい。」

「はい、失礼いたします。」

礼儀正しく頭を下げ、研究員は立ち去る。

ここは社長室なのだろうか、20畳ほどのフロリングの部屋に、大きな社長机と革張りの椅子。

壁は前面コンクリートで、机の上にはノートパソコンと電話機が乗っている。

社長は椅子をくると反転させ、一同に向かう。

学校の校長がそこにいた。

「校長先生!？」

全員目を疑う。しかし目前にいるのは紛れもなく校長先生である。

「そうだよ、私だ。君たちの校長の田中だよ」

にこやかに社長・・・校長が微笑みかける。まるで、先生が生徒に向けるそれと同じように。

「なんでこんなところにいるんですか!さっきの研究室みたいなところはなんなんですか!」

「手錠早く取ってください、私たち何もいけないことしてません!」

「先生、気持ち悪い・・・助けて・・・。」

進介、美夜、菜緒がそれぞれの思いを口にする。

「ははは、まあそう焦るな。ちゃんとした理由があるのだよ。」

「はははじゃなくて、最初から理由を言って連れて来れば良かったんじゃないですか?正当な理由があるなら、手錠や実銃なんて使わなくても素直にここまで来ますよ!」

疾風が食いかかる。みんなも同じ目をして校長を睨んだ。

だ実験段階でしかないが、すでに実戦投入できるナンバーもある。戦い、殺すことだけしか知らないんだ。なんとも素晴らしいではないか！

ああ、そういえば、なぜ人型にしたと思う？

答えは「便利」だからだ、スーツを着せてボディーガードに紛れ込ませれば、要人暗殺など容易。しかも「造られた」生き物である以上、消すも生かすも自由。街中でいきなり暴れだしたらどうなる？とつてい並みの人間の力じゃかなわんよ。混乱するだろうね……くくく……。

筋肉や構造を変形させ、弱点となる内臓系は鉄の板が埋め込まれて守られる。銃もたいして効かんだ。SAT（日本の警察特殊部隊SWATのようなもの）でも出勤しなかり止めるのは無理だね。それが日本各地で展開されればどんなに楽しいことだろう。もちろん、世界でも通用する力を作るがね。」

「あの、それと先輩とどう関係があるのでしょうか？」

美夜が訊ねる。先輩とは疾風のことだ。美夜が先輩と呼ぶのは疾風のことだけで、それ以外は、君・さんを付けて年上を呼ぶ。

「いい質問だ。人型といっても只の人間じゃ芸がないだろ？第一弱すぎる。そこで、人型の怪物に目をつけたのだ。分かりやすく言うとヴァンパイアや狼男、その他大勢だ。やつらは強い、人間を遥かに凌駕する身体能力や特殊な力を持っている。」

しかし存在するのか？平丘君、いたらどうする？」

「存在したのでしょうか？現にその実験が進んでいるじゃありませんか。いたとしても、なんとも思わないですね。自分には何の関係もないし、どうでもいいことです。」

「どうでもいいと言っな。自分もその仲間だぞ？」

一同が顔を見合わせる。疾風がヘマトフィリアだということはこのにいる学生全員が知っているが、ヴァンパイアとはまるっきり別だと思っっていたからだ。

疾風は、しまった！と心の中で悪態ついた。血を提供してもらった現場を見られたかと。

それで校長は疾風がヴァンパイアだと勘違いしているのかと思った。

「いえ、何かの間違いです。」

「そんなはずはない、間違っていない。」

「面倒なので言っておきますが、俺はヘマトフィリアです。血液嗜好症。確かに血は好きですが、ヴァンパイアのそれとは違います。」

「いいや、君はヴァンパイアだ。間違いない。私が保証するよ。」

保障されたって何の安心感も得られない。寧ろ怖い。

「校長先生？いくら偉くたって、生徒を勝手に伝説の怪物にしてはいけませんよお？」

半笑いで諒子が言う。確かに、他人の宣言で所属する生物の学名を

変えられたらたまつたもんじゃない。

「だから、なぜ信じない？」

「当たり前です。確かに最初はバンパイアの類かとも思いました。ちよつと怖かったこともあります。だけど、血のことを除けばどこから見ても人間です。先輩は真正正銘の人間です。校長先生が先輩をヴァンパイアだと保証するなら、私は先輩を……人間だと保証します！！！！」

「そうです。ちよつと人間っぽくないところあるけど、人間的な要素ばっちりです。」

美夜の発言に少し心動かされた……と思つたら進介の意味不明目の喪失な発言に肩を落とす疾風。

「先生……俺はニンク嫌いですけど食べてもなんてことないですし、銀にも変な感じはしません。十字架を見ても何も感じません。仏教徒だからかな？それに、陽光を浴びても何の変化も起きません。」

「平丘君、君の言っているものは全て迷信に過ぎない。太陽に関しては抗体がある種族がいるみたいだがね。」

「仮にヴァンパイアだとしましょう。俺が欲しいのだとしたら、なにも友人まで巻き込むことないでしょう。重大な秘密を喋る前に……いや、もともとこいつ等を巻き込む計画でしたね？材料がなければ……実験ができませんものね……。」

「ちよつと待つてよ。材料って、ヴァンパイアって勘違いされてた

疾風だけじゃないの？」

「悠、俺は材料じゃなくて・・・レシピなんだ。何も無いところからは何もできない。これは俺の考えなんだけど・・・。」

疾風が言いにくそうに口ごもる。それを継ぐように進介が話す。

「ヴァンパイアや人型で強力な種族から、身体的な情報をDNAか何かで調べ上げたり、その体と人間の体を比較してデータを取るんだと思う。伝説の怪物、これがレシピさ。」

次に輝が口を開く。とても辛い宣告をするように・・・、半ば涙声で・・・。

「そのデータをもとに、人間の体をベースに改良・・・、いや、変形をもたらす何かを施すんでしょ？もとが人型だけに、そのほうが最初から造るより都合がいいものね。人間、これが材料でしょ？」

ここまで秘密を聞かされた以上、無事に家には・・・いや、二度と家には帰れないことを一同は悟る。

張り裂けんばかりの声を上げて泣き崩れる悠。気分が悪くなったのか、再び激しく嘔吐する菜緒。

もう胃には何も無いのか、胃液を吐き出してもがいている。

美夜は立つたまま下を向き、美しい髪に顔を隠しながら目から静かに、ゆっくり流れ出る澄んだ雫を重力に任せている。

進介と輝は、向かい合ってお互いの肩にお互いの額をもたれて、涙

声で何か言い合う。

両手で顔を覆い、しゃがみ込んで声にならない泣き声を絞る諒子。全身にガクガクと震えが襲う。

本当なら上着を脱いで震える諒子にかけてやりたいところだが、手錠の拘束に縛られている今、それも叶いそうに無い。

黙り込む校長・・・いきなり大声で笑い出す。

「はははは！流石は我が高校の生徒だな！頭が良い！そのとおり、まったくその通りさ！今までたくさん、実験を繰り返してきたぞ！吸血鬼やウルフマン、人魚まで実在したよ！ルーマニアやカリブまで行って、何年かかったと思う？10年は経っているのだ。」

少したれ目がちな疾風が、氷の様に冷たく、酷く鋭角的な眼光を飛ばして言う。

「しかし校長先生、私をヴァンパイアだと言い切る根拠は何ですか？」

「それは臭いさ。君たちの学校に行った男、あいつもヴァンパイアだ。名前はフリク。あいつの話では、君は大覚醒が起きる体だそう。つまり、だいぶ昔のご先祖様にヴァンパイアが、しかも相当な力を持ったヴァンパイアがいる。何世代も後の子孫に起きる大覚醒を行えるのは、強大な魔力・・・と言うと語弊があるな。強大なチカラを持った個体のみだそう。そんな個体が欲しいのだよ。そしてそれが君だ。ちなみに、ヘマトフィリアは偶然だ。大覚醒とは何の関係も無い。」

「あの人、バンパイアだったのですか。じゃあなんで彼を実験台に

しないのです？」

自分がヴァンパイアだということは信じない疾風。

「契約さ。私がルーマニアで初めて捕まえた個体が彼だ。

その時、彼は私にこういったんだ。どうして俺を捕まえるのか。そんなの実験のために決まっているがね。それを言ったら、面白いことを彼は口にした。

俺を助けてくれれば、仲間や、多民族の居場所を教える！

笑ってしまったよ。ヴァンパイアは義理堅い。なのに仲間を売ろうとするのだ。しかしどうだろう、悪い条件ではないね。最初は信用していなかった。

だけど、何度か一緒に仕事をしていくうちに、全て大成功。始めはルーマニアのヴァンパイアを4人程。次はイタリアに言って、狼男2匹。人魚にビッグフット・・・あ、いや、ビッグフットの身体能力は素晴らしいが、手当たり次第に暴れるし言葉が通じないから使い物にならなかったがね。それから・・・様々な種類を300体は、な。お陰でいろいろと資料ができたよ。

あとは人間、材料の確保。これは比較的に楽だよ。そこらへんにたくさん「ある」からね。毎日一人、日本で確保しているよ。なあくに、増えすぎた人口を我々が「調節」してやっているのだ。

┌

輝の肩から顔をあげ、進介が怒鳴る。

「仲間を売りやがった・・・？しかも他種族まで・・・腐ってる！人間を・・・生き物を何だと思ってる！？調節なんて、神にでもなつたつもりか！犠牲になつたものにも、未来はあつたはずなのに！」

「そうかね？歴史的な実験の役に立てるのだぞ？」

いつもとまったく変わらない笑顔で校長が言う。どこから見ても気のないよさそうなおじさんだ。

「さ、お話はこれでおしまい。」

「で？僕たちをどうします？」

「もちろん、実験するよ。平丘君以外は手錠をしたままこの部屋で死ぬまで待機してもらうよ。所謂餓死だ。私は、目の前で苦しめられるのが堪らなく快感でね・・・性交のそれを遥かにしのいでいるよ。」

そう言つて机に2つ並んだボタンの左側を押す。すると天井から厚さ30センチはあるうかという、巨大で透明な物が降りてきて、校長と生徒たちを隔てる。防弾ガラスだ。

ところどころに拳大の穴が貫通しており、声はお互いに届く。大小様々な傷が点在するところを見ると、過去に何度も使用されたに違いないことが分かる。

その傷後を見て悠が呟く。

「もう……いやあ……。」

そりゃ、俺だつて嫌だよ……と心の中で泣き言を言う。

途端に背後の扉が開き、白衣の研究員が二人入って来た。

額に張られた赤いシールを見て、疾風に目で「こっちに来い」と合図する。

「先輩……！」

「平丘！」

「平丘君……。」

「せんぱあ〜い……。」

「平丘先輩……。」

美夜・進介・輝・菜緒・諒子が同時に呼ぶ。もはや今生の別れか。

「………疾風！」

最後に悠が強く、長年連れ添った幼馴染みの名前を呼ぶ。

これで最後になるかもしれない挨拶……。恋愛感情は無い。しかし、どうにも抑えられない気持ちでいっぱいになる。

こんな場面で不適切かもしれないが、愛しく、哀しい。そこには美しい光景があった。

確かに美しい女性ばかりで、絵になる。しかし、そこにいる進介の顔立ちも美しく、みんなの声がかたまる様に、疾風の脳内に響き渡る。特に美男子でもない疾風の顔すら、鋭利な刃のような美しさを放っていた。

「ああ・・・みんな・・・」

「さよならでもいっただろうだ？」

校長が口を挟む。

「そんな言葉、俺たちは知らない。」

それから一呼吸置いて、わざと明るく言って見せた。

「みんな、また会おう」！！！！」

その言葉を聞いた途端、疾風と進介以外泣き崩れた。人前などまったく気にしない様子で・・・。

研究員に両脇を抱えられて疾風が部屋から出る。と同時に素早く閉まり、施錠させられる出入り口。

校長側のほうにも扉はあるが、ガラスが邪魔して通れない。一向に泣き止まない女子。

「さて、私は帰るとするか・・・オヤスミ諸君。」

「畜生！二度とその面見せるんじゃないねえ！」

「ほほほ、威勢のいいこと。」

そういつて校長は出て行った。

部屋にはただただ、哀しみの唱が響くばかり・・・。

やがて泣き疲れて、声が枯れる・・・。

・・・静寂に抱かれて・・・激動の夜が明けていく・・・彼らと・・・
未来は今・・・繋がっていない・・・。

4 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第4話 　　～覚醒～

疾風は金属製のベッドに横たわり、四肢を拘束具で捕らえられている。周りは手術室のようだが、実験室だろう。

あの仲間たちに会えなくなるのは辛い、もう死ぬ覚悟はできている。

ヴァンパイアなんて、なれるわけ無い。第一、どうやってご先祖様の血を呼び出そうというのか。

ガチャ・・・

アルミの扉が開いて研究員4人と、学校に現れた男が入ってきた。フリクだ。

「気分は・・・どうかな・・・？」

くさい息を疾風の顔に吹きかけながら、男が言う。

「ああ～もう最高！お酒でもタバコで研究員でも、なんでもこいや！の勢いだね！」

なかば自暴自棄ヤケクソな疾風。

「昨日一晩で、いろんな神様に祈ったけどね、俺の行い悪いから助けてくれないだろうね！ヒヤハハア〜！」

「脳波が激しく乱れてますね・・・眠らせますか？」

モニターを見た研究員が冷静に言う。

「眠らせるの？麻酔？いいよあ〜、どんどん注射してして！もうぶつすぶすに、二度と起きないようにして！」

「ダメです、脈も血圧も・・・でたらめです。脳波を表示し切れません！」

「あつはつは〜！僕狂っちゃったかなあ〜？いやいやあ〜、元々があ〜？ヒビヒビヒビヒビヒビ！」

「構うな、始めろ。」

研究員が冷たく言い放つ。

途端にベッドが下がり、床と一緒に沈む。ベッドを囲み、床が楕円形に沈む。

ちょうど床が凹んでできた水の入ってないプールのようになった。

「なにになに？どうするの？」

「じつ・・・するんだ・・・。」

いきなり何かの液体が大量に注ぎ込まれる。・・・それは血液。

「あらこんなにたくさん、お兄さん嬉しいわあ。」

本格的に手の施しようがなくなってきた疾風。親が見たら悲しむだろう。

「覚醒には大量の血が必要なのだ・・・人間の血がな・・・。」

「人間の・・・。」

ようやく正気にかえる疾風。

「こんなに人間の血・・・どうや・・・うわっぷー！」

疾風の体が全て血で浸る。今は血に喜んでいる場合ではないがどうすることもできない。

激しく泡を吹き出す疾風。徐々に苦しくなり、鼻から血液が流れこんでくる。

徐々に肺に溜まりはじめ、ますます苦しくなる。もがき苦しむ。

しかし、だんだんと動きが鈍くなり、ついには動かなくなった。

しばらく見つめる男たち。そうやって、20分が経過した。

「おい、何の変化も無いぞ？おかしいな。」

「まさかそんな・・・本当にヴァンパイアじゃなかったのか？」

「脳波や脈なんて、とつくの昔に止まっていますよ・・・死亡確認。実験失敗。」

「この血のために、何人の血を集めたと思っているの？責任はクリフ、あなたがとりなさいよ。」

女性研究員がフリクを冷たい目で捉える。

「そんなはずは・・・なにかの・・・間違いだ・・・。」

「フリク、お前の間違いなんだ。」

「4月2X日午前11時16分、被験体304番平丘疾風死亡確認。」

確実に疾風は死亡した。

「ただの高校生じゃないか・・・フリク！」

目を閉じて紅の海に沈む彼の遺体は、暗い深みへ墮ちていく、罪の行き先のようにも見えた。

疾風絶命と同時刻、いつものように学校で授業（睡眠学習）を受けていたゆきは突然目を覚ます。

心臓が酷く痛む。

「……は……や……て？」

無意識に眩き、無意識に涙が頬を伝う。手のひらが冷たかった。

「どっしたの？ゆきさん。」

珍しく授業中に起きているゆきに国語の先生が声をかける。

「体調がわるいのです……保健室へ行ってもかまいませんか？」

「ええ、保健委員、誰だったかしら。」

「いいえ、ひとりでいきます。」

そう言い残し、教室を出る。一人屋上に向かう。

「はやて……。」

もう一度眩く。

「感じない……。」

動物的な感が強いゆきは、疾風がもはや、この世のものでないことを、無意識のうちに悟る。

彼に何があつたかわからないが、彼の死を確実に掴み取つた。

「どうして……？早すぎるよ……。」

声は無く、頬を伝つて透明な液体が流れる。止め処なく……。

「どうしたの？何か変だよ？」

後ろからゆきの友達が声をかけた。

様子がおかしくて、やはり心配だからと先生に無理を言つて出てきたのだ。

「真紀……うわあああああん！！！！疾風が、疾風があく！！」

このとき、初めて声に出して泣いた。

「どうしたの？泣いてちゃ分かんないよ？彼氏呼んで来ようか？」

ゆきの彼氏は違う学校にいる。しかし隣に隣接する男子校なので、かなり近い。

真紀の言葉に首を振り、涙枯れるまで叫び続けた。

さらに同時刻、悠達にも研究員から死亡確認が伝えられた。

実験で殺されることが分かっていた彼らは、さほど動揺もしなかった。もう流す涙も無い。

「やっぱり……。」

「うん、分かってたけど、かなしいよぉ……。」

「お葬式に参列できるでしょうか？」

「遺体がこの研究所からは出ないから、無理？」

「私たちも出られないんじゃない？」

「辛いねえ……。」

しばらく沈黙。

「出られるかもよ。」

進介が力なく言う。

「どっやって？」

一同を代表するように諒子が訊ねる。

「今、俺の靴の中に、疾風からもらった折りたたみナイフがあるんだ。」

「ナイフなんかでどうするのよ？しかも両手に手錠で満足に動かせないじゃない？」

悠がジャラジャラと手錠を鳴らしてみせる。

「まあ聞いてよ。このナイフの中身はC-4プラスチック爆弾なんだ。量は少ないけど、この穴の開いた防弾ガラスぐらいなら破壊できる。そうしたら向こう側のロックされていない扉から出られる。そこから先はどうなるか分からないけど、ここで飢え死にするより、射殺覚悟で逃げてみない？」

「構わないけど、何でもっと早く使わなかったの？ってゆうかなんで爆弾なんか？」

「タイミングだよ。昨日ずっと聞いてたんだけど、午前3時から午前6時まで工場は一時的に休止する。メンテナンスかなにかの関係かな。工場が稼動しているときはずっと地響きのようなものがしてたでしょ？爆弾は、あいつの趣味。」

向かい側の壁掛け時計を見て言う。

「そおいいえば、しばらく静かになったときあったねえ。」

「こんなこと話していて、盗聴や監視の心配はないのでしょうか。」

菜緒に継いで美夜が辺りを見回しながら言った。

「平気だよ、昨日から機械の出す波長を探っていたんだけど、それらしいのはないよ。有るのはパソと電話機の波長だけ。」

「あんたはアンテナかなんか？ちよつとすごいじゃない。」

「で、どうする？助かる保証はないけど……。」

「………飢え死よりはマシよ。」

みんな無言で頷く。

「よし、明日の午前3時30に起爆させよう。それまで、おやすみ。」

そういつて、各自体力の温存に努めた。

「ほらよ、飯だ。食べ。」

疾風の死体を鉄格子の中の男たちに放り投げる。看守が遠ざかるのを機にいつせいに話し始める。

ここは捕らえた被験体の「保管庫」。世界中から捕えられてきた実験対象が一時的に入れられ、実験体になる日をただ過ごす場所。

「おい、血まみれだぜ？しかもこの兄ちゃんの血じゃねえ。何人も血のおいがする。」

「外傷はありませんね……。まさか、血で溺死？」

男たちの後ろで、ルーマニア語で話している長身の大男がいる。狼男だ。

「この方は、『その死体から、ヴァンパイアの臭いがする』とおっしゃられています。」

大男のそばにいた品のいいメガネの男性が通訳した。恐らく、黒魔術師だろう。

「???鼻のいい狼さんには分かるのかな？」

「確かに……。我々と同じ匂いがするぞ。」

「でも死んでる……。」

「畜生、あいつらひでえことしやがる！」

「同朋の肉なんて食えるわけねえじゃねえか！」

様々な国の言葉が飛び交う。

「いや……。生きてるよ。」

小さな男女の兄妹が、そばでささやく。人魚の兄妹だ。今は足が人間のそれと同じだが、うろこで分かる。

「このお兄ちゃんの“中”で、いっぱい変わっているよ。」

「覚醒……ですかね。」

メガネが呟く。

「……今、危ないかも。私たちの血、飲ませなきゃ。」

人魚の血には人を生き返らせる力がある。生きている人の傷口に塗ると治癒する能力もある。

「なにか、切るものは無いですか？」

「その兄ちゃんが腰に下げてるもの、あれじゃ切れねえか？」

そこには紅く汚れたダガーが鈍く光っていた。

何の戸惑いも無く腕を切る人魚の少女。人間にしてみれば10歳ほどの顔つきだろうか。

白く細い腕に長く引かれた紅の線を、倒れている疾風の口元に押し付ける。途端、急に目を覚ます。

当然の結果に一同は驚きもしない。

痛みを堪えて顔を歪める幼い少女。無意識のうちに傷跡を舐める血まみれの少年。

それは、眩いほどに官能的で、全てを拒絶する厭らしさを兼ねてい

た。

やがて、深いため息のような吐息とともに疾風が体を起こす。

「う……気持ち悪……オエエ……。」

ビシャビシャと大量に吐血する。もちろん彼のものではなく、肺や胃にたまっていたものだ。

「覚醒第一段階完了ですね。」

メガネの黒魔術師が着ていたYシャツを脱いで、少女の傷口に強く巻いて止血する。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「うう……胃もたれする……。」

「やつらは焦りすぎて、ちゃんのと覚醒開始まで見ていられなかったんですね。」

「覚醒には2時間はかかる。」

「おい少年、話は聞こえておつたらう？」

「はい、体は全然動きませんでした。意識はハッキリしてました。いったいどうして？」

「劇的に変化を……といっても肉体的な変化はあまり目には見えないのですが、その変化を受け入れるために一時的に身体機能が停

止めるのです。なぜ意識が飛ばないのかは、ヴァンパイアの間でも未だに分かっていません。」

「ちょっと待ってください。・・・そうすると、僕はやっぱり大覚醒を起こすヴァンパイアだったのですか？だから、血で溺死しないですんだということ？」

目をまん丸にして疾風がメガネに問いかける。

「そうゆうことですね。詳しくは知りませんが・・・。」

それを引き継ぐように、黒人の体格のいい男が喋りだす。日本語で。

「何の変化も実感できないだろ？」

「ええ、何か変わりました？」

「犬歯が少しだけ伸びている。」

確かに、口の中に若干の違和感があった。

「それだけ？」

「肉体的にはそれだけだ。」

「は？」

「後は・・・自分で確かめるしかない。」

この鉄格子の中には何人かヴァンパイアがいる。

それぞれには立派な犬歯を持つもの、魅惑的に黒く薄い膜でできたような翼を持つもの、様々だ。

象徴的な身体的特徴を兼ね備えている。腑に落ちない疾風。

「あの、大覚醒したってことは、僕のご先祖様はさぞかし立派なヴァンパイアだったのでしょうか？なのになんで・・・犬歯が少し伸びただけなのでしょうか？」

「我々からすれば、だいぶ「変化」「したと思いますよ。変化は見えるものではなく、感じるものなのです。」

「????」

頭の中カーニバル状態の疾風。ウサギさんやカエルさんがぴよんぴよんと跳ね回っている。

「今に分かる、もう何も聞くな。」

有無を言わさぬ表情。ビビる疾風。

「・・・はい。」

疾風は妙に落ち着いていた。自分はヴァンパイアでよかったと思い、行動に移すべき選択肢を探す。

人間ではない自分にさほどショックを受けず、逆に、感謝。ありがとうご先祖様。

そのご先祖様がいなければ、今回の事件に巻き込まれることはなかったことなど、単純な疾風は気づかない。

進介たちはまだ生きているだろう。校長が餓死させると言っていた以上、数日は確実に生きているはずだ。

勝機は・・・ある！しかし、ある疑問に直面する。重厚な牢獄に囚われているならまだしも、鉄格子など狼男の力で簡単にこじ開けられる。

「どうして・・・逃げないのです?」

「今日がその日だ。」

「はい?」

「今日は満月・・・。」

狼男は感覚的に分かるのだろう。

「じゃあ、今日逃げるのですね?」

「兄ちゃん、あなたは運がよかったな。満月の夜は、俺たちの力が最大限に活かせる。たとえば、視覚的に認識しなくても、体に分かるんだ。」

「ただどな、いくら俺たちが人間より強くたって、あつちには俺たちに改良を加えた生物兵器がうようよとのさばってるんだぜ?まともにもやりあつたら、物量の差で負けるのは当然だ。だから、なるべく戦闘を避けていかにゃならん。」

「友達が・・・社長室に囚われているんです。一緒に助けてください！」

「それは難しいですね・・・我々が逃げるので手一杯です。それ以前に、逃げ切れる保証も無い。社長室は場所も分かりませんし。」

「まだ高校生なんです、、それに、俺のせいで巻き込んでしまったようなもの・・・。」

「何人だ？」

「6人です・・・。」

「多いな・・・。」

「お願いします！」

「仲間・・・か？」

「大切な人達です・・・。親友に幼馴染、元恋人によき理解者・・・みなさんにも、いますでしょ？」

しばし沈黙。

「俺は・・・手を貸そう。」

「私も協力させていただきます。」

「そんなら俺も。どうせ生きるか死ぬかわかんないし、うまくいけばもうけもんじゃん?」

そういつて、何名かのヴァンパイアが立ち上がって疾風に向かった。

「ありがとうございます。」

「仕方ない、作戦変更しますか。」

「作戦?」

「脱出経路の変更ですよ。この施設のどこを通っても、必ず生物兵器に接触します。一番抜けやすい経路を考えてたのですが……。」

「あ……ごめんなさい。」

「いやいや、どのみち一か八かの大勝負ですから。」

「そういえば、うまく施設を抜けられたとしても、それからどうなさるのですか?」

「車が待っている。」

「だれの?」

「我々のだ。」

「連絡取れるのなら、増援を要請すればいいじゃないですか?」

「それは、仲間を危険にさらせといっているのか？」

「あ……いや……そうゆうわけじゃ。」

メガネが優しく言う。

「我々は、どんな種族であっても、少数だということに変わりはないんです。もし失敗したら、余計に被害が出てしまう……分かりますね？それに我々が行動を起こすのは、決まって満月なのです。人間たちはそれに気づかない。連絡は取れてないのですが、暗黙の了解で分かります。」

「はい……。」

「最終的には、大きな鉄の扉を通らないといけません。出入り口があそこしかないのです。外側からはカードキーが必要なのですが、内側からはボタン一つで開きます。」

「どうしてそんなこと知っているのですか？」

メガネがニヤリと笑いながら言う。

「この職員でした……正確には諜報活動スパイをしていたのですがね……。」

疾風が息を吹き返したとき、ちよつどゆきの涙も枯れる。

「・・・？生きてるの？」

「ん？」

突然に泣き止むゆきを不思議がる真紀。

「生きてる・・・生きてる！」

「ん??????」

ますます訳の分からない真紀。ひやすらに泣いていたゆきを抱きとめていたので、事情など一切知らない。

徐々に手のひらに温かさが戻ってきた。

「良かったあゝ・・・でも・・・違う・・・。」

「何が違うの？」

「流れ。」

「流れ？」

そう言ったまま、何かを考えるようにゆきは黙り込んだ。

5 s t a g g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第5話 〈聖戦〉

前編

午後九時

「よし……そろそろ。」

「ええ。」

「ああ。」

「いくか……。」

「うん。」

「みんな、死ぬなよ。」

「お前もな。」

「やるしかない。」

「……ぶっ……。」

「幸運を……。」

「神のご加護を。」

「アーメン、牧師さん！」

疾風の言葉を最後に3人の狼男が鉄格子をこじ開ける。

バキバキ……ギギギギギ……ベキン！

2メートルほどに大きな穴が開く。

「よし、行こう！」

20人の人影が牢屋から姿を消す。

とたんに、赤い回転灯が激しく回りだし、警告音が鳴り響く。

こんなことは予想のうち。あわてる様子も無い。

「我々は出入り口を可能な限り確保する。あまり遅くなるなよ？」

「ああ、人間のお嬢さんたち助けたらまっさきに向かうさ！」

「じゃあ、」「また後で！」「」

そういって、各自二手に別れて突っ走る。

・・・まるで荒野を駆け抜ける一陣の疾風かぜのようだ・・・。

警告音は社長室でも鳴り響く。

弱っていく少年少女をみて、校長が下卑た笑いを浮かべている最中だった。

電話機を取って社長が言う。

「何事か！」

「被験体保管庫から、全個体逃走したもようです！」

「なにいく・・・？逃げただとおく・・・？すぐさま確保しろ！実弾使用許可！ただし殺すな！」

「了解！」

ガチャ・・・

「なんてことだ・・・。」

「校長先生も行った方がよろしいのではないのでしょうか。」

冷静に美夜が言い放つ。

「黙れ！言われずともそうするわ！」

そう言つて、奥の部屋に消える。

「何があつたか良くわかんないけど・・・脱走があつたっぽいね。」

「今、逃げ時じゃない？私たちを見ている人なんて誰も居ないよ？」

進介と悠が続く。

「でも、実弾使用許可つて・・・。」

「レシピ」「」が逃げたんだあゝ・・・。」

しばし沈黙・・・。

そして全員同時に口を開く。

「今だ・・・！」

進介が靴を脱ぎ、ナイフ・・・もといC-4爆弾を取り出す。

そして靴を履きなおす。しゃがみ込んで床の爆弾を背面で取る。未だに手錠は架せられたままだつた。

指の感覚を頼りに爆弾と導線に信管をセットし、爆弾をガラスの穴につっこむ。

使い方は、疾風が日常的に学校などで話していたので、迷うことは一つもない。

そして3メートルほどだろうか、いっぱいまでに導線を引き伸ばして声をかけた。

「部屋の隅っこにおいて！爆風に巻き込まれるよ！」

一同は爆弾から一番離れた角に寄る。

「時限式か・・・助かる・・・。」

小型の起爆装置を握り締めながら、ダイヤル式のボタンに気づく。

めいっぱいまでダイヤルをひねり、進介も走って角によった。

「あとどれくらい？」

「2秒。」

「は？」

悠の「は？」と同時に爆弾が起爆される。

ズバシユ・・・

という、かなり小さな音とともに薄い煙に包まれる。

しかし依然として巨大なガラスの影は聳え立つ・・・。

「失敗・・・？」

不安そうに諒子が嘆いた。

だんだんと煙が晴れていく。同時に、進介がニヤリと不適な笑みを浮かべる。

「いいや、ちょうど良かったよ。」

ガラスには十字に亀裂が入っていて、少しでも触れれば4つにばらけてしまうだろう。

進介はその十字の真ん中に足をあて、ゆっくりと前に体重をかける。やがて、ガラスは自らの重さで自然に倒れてゆき、ほとんど音もなく絨毯に沈む。

「開通記念万歳。」

「ふざけてないで行くわよ！」

「ええ、急ぎましょう！」

奥の部屋はどうなっているか分からない。しかし飢え死にするよりは・・・、と心に留めながら一同は進んだ。

扉を開けてみると、そこは小さなロッカールーム。また奥に扉がある。

中央のベンチに大型拳銃・デザートイーグルが無造作に置かれている。

た。

当然一同は名称など知る由も無い。

「手錠、壊せる？」

「やってみよう。」

背中越しに腰の辺りでデザートイーグルを掴んだ進介がベンチに座り、背中合わせで輝が座る。

右手でグリップを掴み、悠の指示で、手錠の鎖だけを撃ち抜ける角度に合わせ・・・引き金を引く。

ドズウーン・・・

という発射音のあと、すぐに輝の手錠の鎖が弾けて両手が自由になった。

しかし発射の衝撃で銃身が跳ね上がり、進介の手からすっぽ抜ける。進介の背中に、したたかにぶつかる。

「い・・・いつてえ・・・。」

「大丈夫？」

「泣きそう・・・。」

拳銃ほどの鉄の塊が直撃したのだ。泣きたくもなるだろう。

そうしている間にも、両手が自由になった輝が、両手でしっかりと構えて鎖を狙って引き金を引いている。

が、やはり撃つ瞬間だけは目をつむってしまふ。全員の手錠が二つに分かれた。

その時、不意に奥の扉が開いた。研究員が入ってきたのだ！

「・・・！？なにしてるんだ！」

幸いあつちは一人、仲間はずなかつた。

目の前の光景に驚く研究員。無線機で連絡を取ろうと慌てて無線機を取り出すが、焦って前方に落としてしまふ。

落ちた無線機に向かって、デタラメに弾丸を浴びせる輝。

5発撃つて1発命中、無線機は碎け散り、ただの燃えないごみになつてしまつた。

ごみに出すときは、電池を抜いて正しく処理することを忘れてはいけない。

デザートイーグルはスライドストップがかかり、弾切れ。

「クソ！」

懐に手を入れようとする研究員に、爆弾が入っていた折りたたみナイフを逆手に持ち、前方にダッシュして一気に距離を詰める進介。もう彼の目には研究員の喉元しか映っていない。

懐から刃物が抜き出される。護身用の小型のナイフ。

しかし大きく腕を伸ばし体重を乗せて振られた進介のナイフのスピードには間に合わず、喉元にナイフが突き立てられる、取っ手しか見えないほどに、刃は深く差し込まれていた。

「……！」

声にはならない断末魔を残し、研究員が最後の力を振り絞って進介にナイフを振りかざす。

その腕の動きを察知した進介は、素早く喉元からナイフを抜き取り、心の臓目掛けて叩き込む。

骨と刃が擦れる感触は敢えて気にせず、非情に努めた。

やがて、壁にもたれかかるようにして沈んでゆく研究員。

進介の目には赤く汚れたタンパク質の塊しか映っていなかった。研究員のナイフを取り、投げ捨てる。

美夜以外は、目をつむったり視線を逸らしたり、なるべくその死体を見ないように努めていた。

「お怪我はありませんか？」

「……なんともないよ。」

美夜と進介が短く会話する。進介は返り血一つ浴びてない。逆手に握ったナイフは、赤黒く濡れ、滴る鮮血が涙を流して泣いているようにも見えた。

「体が・・・勝手に・・・。」

「それは」「仕方ない」「ことですよ。私がナイフを持っていたら、同じことをしました。」

「そんなこと、綺麗ごとだ・・・。」

「そうです。綺麗ごとです。」

そう言って、投げ捨てられた研究員のナイフを拾い上げる美夜。

中央のベンチに移動して頭を抱える進介。

「正当防衛・・・って言葉、あるじゃない？」

「そおだよ、「レシピ」「でもない私たち、殺されちゃうところだったよ？」「材料は」「いくらでも、手に入るからね・・・。」

「しっ！もう一人来きます！」

一同が美夜の顔を見上げた瞬間、また研究員が入ってきた。

「な・・・！！・・・！！」

美夜が素早く左手で口を塞ぎ、後ろに回ってナイフで喉元をかき切った。

足元の同僚の死体に意識をひきつけられ、美夜たちの姿を確認できないまま絶命した。

「・・・ほら、私も同じこと、しましたでしょ？」

酷く暗い、しかし戦慄を覚えるまでに美しいその横顔。人を殺めた少女の横顔だとは誰も思うまい。

「もう、止まらないね。もともと止まるつもりなんてないけど。」

悠が現実を受けとめる。その場に居る全員が思い出す。そう、もともと死ぬ気で脱出を図ったのだ。

「武器は・・・無いか？」

目が座ってる進介。もうどうにでもなれという勢い。

不意にロッカーを開ける菜緒。中には・・・重く黒光りするものが大量に詰まっていた。

「銃？手榴弾も・・・あ、防弾チョッキ。」

菜緒が手にとって見る。全て本物だ。

それぞれが近くのロッカーを開け始める。

「この大きい筒、何？」

「日本刀？ナギナタ？」

「マシンガンだ・・・おもろい・・・。」

「ヘルメットもあるよ。機動隊みたいな透明な盾も！」

「よし、みんな、念のため武装しよう。動きを考えると、重装備はできないけど、必ずマシンガンと予備の弾劊は持つていこう。」

「弾劊つて？」

「マガジン・・・その、弾が詰まっている細長い箱みたいなやつ！」

「あ、いっぱいあるね！」

「それ、何？」

「ロケットランチャーじゃない？」

「・・・！？そんなもんまであんの？」

「持つて行きます？」

「いや、重いし怖いし危ない。」

「これは？」

小型のタクティカルショットガン、ベネリM3の派生機を指して輝

が言っ。

「ショットガン・・・散弾銃だよ。」

などと、少しだけだが銃の知識がある進介が説明攻めになる。

結局、10分ほど使い方や装備について説明した後、防弾チョッキとマシンガンのMP5AK4クルツと予備弾創5本と手榴弾2つ、ヘルメットをベースに、好き勝手に持っていくことにした。

「社長室は・・・どこ？」

「そんなもの我輩が知るか！」

「とにかく走って探すしかないですよ。」

「早くしよつや。」

5メートル四方の大きな通路を用心しながら進んでいくヴァンパイアの4人。

今となつては疾風もその一人。未だに腰のホルスターや足首にはナイフやダガーが付いている。

当初10本持っていたが、進介に渡したのが1本。人魚の少女が使ったのが1本だが、その少女が気に入ってしまったため、あげてしまったのだ。よって今は8本の刃物がある。

相変わらず警告は鳴り響いている。研究員の姿が見えない。恐らく避難したのだろう。

「ちよいと止まってや。」

急に止まった若いヴァンパイアが話す。彼は日本人のヴァンパイア。細身でいかにももてそうな「イケメン」だ。

「その角曲がったら、いるで。あいつら。臭うわ。」

「生物兵器ですか？」

「同つなずく。」

「面白い……。」

そういつて、中肉中背の男のヴァンパイアが走り出す……というより跳び出した。

いつの間にか爪と犬歯が伸びて、背中にコウモリの羽が生えている。驚きもしない疾風。

男が角を曲がった瞬間、黄色い液体が大量に男目掛けて飛んでくる。酸だ。

横に転がって避けた男の前に4体の黄緑色の人間……人型生物兵器が喉を鳴らして待っていた。

酸が壁にかかり、じゅうじゅうと音を立てて穴を開ける、壁に埋め込まれた配線がむき出しになり、酸で断線する。途端に警告音や回転灯が止まる。

人型兵器は、それぞれ胸に「a-20」や「a-08」などと彫られた鉄板が付いており、彼らの「番号」「」を表している。つまり、「a-20」は、「a」タイプの製造番号「20」ということだ。

体中は粘液が付着しており、異臭を放っている。背丈は全て190センチはある。

筋肉質な体つきで衣服は一切まとっていない。体のどこを見ても体毛は存在せず、性器も見当たらない。

目は開きっぱなしの真っ黒な目。瞳は無い。口にいたっては、何故か上下ではなく左右に開いていた。

「ウゲ・・・バイオハザードみたい・・・。」

「だからどうした、潰すまでのこと!」

その中の一体が男目掛けて猛スピードで走ってくる。見かけより早く動ける。

指の爪が50センチほどまでに伸びた男がa-20に向かって爪を振りかざしながら高く跳ね上がった。

後ろに居た3体が口から酸を吐き出すが、男の羽ばたき一つで相殺され、虚しく地面に酸が落ちる。

「ほら、お主らも戦ってはどうか？」

3人は自分たちの爪を見た。疾風以外は20センチほど爪が伸びている。

「なんだか気持ち悪いけど、行くしか無いわね……。」

「兄ちゃん、戦えるか？」

「刃物はあるし、殺人術や体術はならったことありますが……通用する相手でしょうか？」

「大覚醒が起きる体なんや……いけるはずやで。」

疾風は思った。どうせ人間だったら一度は死んだこの身、友人のために捧げてみようではないか。

現に、自分の友人の為に、見ず知らずのヴァンパイアが戦っていてくれる。

「……行く！」

そう言って走り出す疾風。後ろの3体にむかって走り出す。距離は30メートルほどであったのだが、走り始めて2秒後にはもう目前に3体が立っていた。

「うわ！早！」

「それがヴァンパイアの動きや。そのうち慣れる。」

「私は真ん中のを潰すわ。」

「そんなら俺は右やるわ。」

「・・・俺は左か・・・。」

別にどれでも同じなのだが、それぞれに分かれる。

その時彼らの後方では、男とa-20の戦いは続いていた。

「なかなか」「硬い」「な・・・。鋼鉄並みの我輩の爪が刺さらんとは・・・。」

先ほど飛び上がったときに落下に任せて脳天に爪を立てた男だが、皮膚は容易に貫通したものの、頭蓋骨が貫通しない。体中のどこを切りつけても皮膚しか切れないのだ。

太い腕を振られ、弾かれて壁に叩き付けられる。

「ハア~~~~・・・ハア~~~~・・・。」

と、くさい息を吐いては時折酸を飛ばしてくる。

「皮膚の下は急所の要所要所に合金の鎧が入っているのか、それなら・・・！」

わざと懐に飛び込み、取っ組み合いになる。片腕でa-20の両腕を押さえ、もう片腕で瞬時に両脇腹に、切込みを入れた。そして皮

膚を剥がす。それを体全体に、なんども取っ組み合いに持ち込んでから行う。

しまいには全て剥がしてしまった。

「胴体の前後1枚づつ・・・頭蓋骨は全て合金。下半身と腕は前方のみ。なるほど・・・こうなっていたか。」

激しく吐き出される酸に気をくばりつつも、正確な分析を始める。

「さて、どうやって倒すか・・・剥がしてみるか・・・。」

そついつて最後の取っ組み合いに挑む。

相手の両腕を使った攻撃を片手で受け止める。そして右手の爪を僅かな合金と合金のあいだに滑り込ませた。

「ギヤアアア~~~~~!!!!!!」

暴れだすa-20。構わずに思い切り胴体の前方をカバーする合金を引っ剥がす。

メキヤメキヤ・・・ベリベリベリベリベリ!!!!!!

激しく音を立てて、合金が引き離される。丸出しになる臓物。

一緒に筋肉も剥がされてしまったのか、アバラ骨と内臓がくつきり見える。

配置は人間のそれと変わりはないが、胃が異常に大きかった。仰向けに倒れ、もはや絶命寸前の a - 20。

今なお激しく心臓が脈を刻んでいる。

「吐き出していたのは胃酸か……。」

そういつて爪を一本立てて胃を切り開いた。溢れ出る胃酸に周囲の臓器が溶けてゆく。

それが心臓まで及んだ。もはや声は無く、ビクンビクンと動くばかりのタンパク質。

異臭を漂わせて、今なお心臓は動き続けている。

その周辺に左手の5本の爪を立て、突き刺す。そしてドアノブをひねる様に回した。

グチュツ……

完全に心臓が孤立した。 a - 20、沈黙。

「なるほどな……おい、これを見る！」

「今それどころじゃないわ！」

「じゃあ、聞け！わきの下に小さな隙間がある。そこから爪をすべ

りこませれば心臓を刺せるぞ！」

「りよ〜かい、やってみます〜。」

「爪？2ミリしかないよ……。」

「おい少年！手伝ってやるうか？」

笑いながら男が言う。

「冗談！俺だってヴァンパイアなんだ！一人でやります！」

満足そうに微笑む男。疾風の内心はヘルプミー警報鳴りっぱなし。

「俺には爪も牙も無い……あるのはナイフ……。全部小型で、心臓に届きそうなのは無い……。懐に潜り込んだら確実に振り払われる。あんな太い腕で殴られたら痛いだろうな〜。潜り込んで、振り払われる前に息の根を止められるか？」

敵はどんどん迫ってくる。無意識に両脇に携帯していたダガーに手が伸びる。鞘から抜かれたダガーを見て、自分の武器の効果に気づいた。

両脇に携帯していたダガーには、猛毒が仕込まれている。刃も側面の溝も動物性の毒で湿っているほどにだ。

象でも即死の猛毒だ。これを体のどこかに突き刺すことができたらかっこの勝ち。潜り込んで失敗したら負け。

「来い！」

ダガーを握り締め、脇一点に狙いを定めた。

首を掴もうと、左腕を伸ばしてくる。難なく左に避けて足払いをかけた。

しかしよろける程度に終わり、再び腕を伸ばしてくる。しかも両手。腕の裏側は合金が無いことを思い出し、敢えて首を掴ませる。

「うぐつ!?!?!?」

掴まれた首をへし折らんばかりの予想外の力で締め上げられ、思わずダガーを離してしまった。

「う……ぐ……。」

マズイ、殺される……畜生!

声にならない叫び。頭の中がだんだん白くなっていく。

人体急所を思い出す疾風。幼いころから習ってきた殺人術や護身術を思い出す。

ここから手を伸ばしても、相手の胴には届かない。範囲はせいぜい肘ぐらいか……。

とっさに腰のダガーに両手を伸ばし、相手の手首を深く切り込む。

そう、合金に覆われていない弱点もあったのだ。

左右手首の腱が切れ、物を握れなくなる。当然疾風も抜け出す。

「苦しがつてる暇は無い！」

そう自分に叫んで未だに伸ばされている相手の肘裏を切り裂く。

腕の腱を切った。これで腕を動かすこともままならないだろう。

「グ!?」

敵が短く叫び、一步引いた。今やこつちが優勢。

素早く前転し、相手の足元で刃を走らせる。

バチン!

という音がし、ガタガタと倒れこむ生物兵器。

立てないようにアキレス腱を狙った連撃が成功した。

下敷きにされないように素早く飛びのく。

「……!ゲホツ……っう！」

さっきまで絞められていた首が、苦しみを取り戻す。

隣では、腱を切られ思い通りに動け無くなった巨体がバタバタとも

がいている。

「止めを・・・刺さなきゃ・・・。」

落としていた毒入りダガーを拾い上げ、腕の内側目掛けて投げ込む。ダガー投げが得意な疾風は、確実に思ったところへ突き刺せる。

左の二の腕に突き刺さり、5秒ほどもがいたものの、直ぐに動けなくなる。

「はぁ・・・疲れた・・・。」

死の恐怖は、もう無い。ちょうど他の二人も、心臓を刺し終えて決着が付いたところだ。

「よくやった。」

「へえ、本当にやつちやんたんだ？」

「さすがね。」

ちつとも嬉しくない。そんなことを思いながら、毒入りダガーを向き取る。

鞘にしまえばもう一度毒が付着するので、ある程度は使えるはずだ。

「・・・先を・・・急ぎましょう。」

勝利に酔いしれている暇など無い。

無言で一行は走り出す・・・宛ても無く・・・。

6 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第5話 ～聖戦～

後編

「まってえ〜・・・重いよお〜・・・。」

菜緒が情けない声を出す。進介の言いつけを守らずにかなりの爆装を纏いながら歩いていた。

「だからそんなに持つてくるなって言ったじゃないか！」

「使ったみたいのお〜・・・映画のヒロインみたいじゃない？」

「ふざけてる場合かよ!！」

「だつてえ〜・・・。」

厳しく注意した進介も、二挺拳銃で映画のヒーローを気取っている。

しかしそれほど重荷にはならないので許せる範囲。

「まあまあ怒らないでよ。菜緒ちゃん、少し持つわ。」

「私も。」

悠と輝が菜緒が背負っていたリボルバーランチャーとM203付きM16ライフルを取り外す。

「ありがと！ああ、楽になった……。」

一団は今、広い通路を歩いている。前方にシャッターがあり、行き止まり。

今まではロッカールーム以来、敵に遭遇していない。

「行き止まり……引き返しましょう……、え!?!?!?」

美夜が何かを見つけ、指を指す。

「あ……あれ……。」

「ん？旧生物兵器保管庫？」

「マズインじゃない？」

「旧って何よ、旧って!?!?」

「なんか……来るよ!?!」

輝の言葉を最後に黙り込む一同。

次の瞬間……

ガインガインガインガイン……ガチャン！

シャッターが開ききった、その先の闇から異形ものたちが続々と現れる。

巨大化したヒルが何匹も壁や天井からぶら下がっている。体調2メートルはゆうに越えている。

「わあ……凄いな。」

「うん、スゴイ。」

「本当にすごいですよね……。」

「すごく凄すぎて、もうスゴイとしか言えないよお。」

あまりのも「キシヨイ」「光景に頭がショートしてしまったのか、壊れたのか、いずれにしろ現実逃避。

人間の臭いを感知し、敏感に頭を振っている。

次の瞬間、全てのヒルが地面に落ち、一気に体を縮めて中に飛び出す。

1跳びで2メートルほど距離を縮めてきた。

「ひゃあ！こっち来る！」

「ちょうどいい、撃つ練習しよう。みんな、クルツ持って。」

「このちっちゃいマシンガン？」

「そう。セレクターレバーの使い方は教えたよね？」

「このカチカチするやつ？」

「そうそう。連射できる状態にしてね。」

そういつて、各々が構える。腰だめで撃つもの、正面で狙をいつけるもの、それぞれだ。

「マガジンの交換はさっき練習したよね？」

「うん、3秒以内でできるよ。」

「じゃあ、それぞれ撃ってみよう。どうぞー！」

パパパパパパパパパパパパ……

パパパ……パパパ……

10メートル先にいるヒルが弾け跳ぶ。

少女達が構えるマシンガンで次々に飛び散っていく。なんとも奇妙な光景だ。

「気持ち悪いねえ〜……。」「

「言わないでよ、気にしないようにしてたんだから……。」「

「なんていいますか……。」「

「なんとも言わないでおこうよ。」「

パパパパパパ……。」「

パパパパパパパパ……。」「カチン！

「弾切れ……。補充します。」「

チ……。カランカラン……。ガチン！カチン！

「……。気持ちいいかも……。」「

「^^^^、いいね、これ。」「

本格的に壊れた少女たち。

「もう一度撃つ?」「

「もったいないよ。練習はこれでおしまい。あとは俺がやってくるよ。」「

「気をつけて。」「

「ああ……。」

殆どのヒルは、少女たちの一斉掃射でグロテスクなオブジェクトへと変わっている。

生きているのは2匹。進介が背中に背負ったナギナタを手にして手前のヒルに近づいていく。

不意に体を縮め宙に飛び出し、進介に襲い掛かる。

「わ！危ない！」

そんな諒子の声をよそに、思い切り空中のヒルめがけてナギナタを突き出す。

剣先がヒルの口から入り、背中から突き抜けた。刺したまま地面に叩き付ける進介。

恐ろしく無言で、さも当たり前のようにそれを見つめる。まだウネウネと動いている。

腰から日本刀を取り出し、片手で頭上に振り上げ足元のヒルに深い線を引く。

ズサツ……又チャ又チャ……

切り口からはなんとも言えぬ「物体」がはみ出る。

それを見て少女たちは言う。

「もう、あんまり気持ちわるいとか思わなくなってきたねえ……。」

「そんな自分が悲しいやら嬉しいやら……。」

「今はそっちの方が都合がいいよ。」

「なんか、また撃ちたくなってきた。」

もう一匹のヒルもジャンプして襲い掛かる。

難なく右に避けながら、着地したヒルに十字に切りかかる。

頭と胴体が離れた。

「また、つまらぬ物を切ってしまった……。」

「余裕ねあんた。」

悠が言った。確かに、異常事態にしては全員肝が座っている。

「あれ？あの壁に地図書いてない？」

シャッターをくぐってすぐ右の壁に地図が貼ってあった。少し湿っている。

それを引っ剥がして輝が言う。

「出口……遠いね。早く行こう。」

薄暗いシャッターの先の世界。ヘルメットのヘッドライトや銃器のフロントサイトベースにくくり付けられた、小型ビームライトを使用する。明るい光の筋が汚い闇を貫いた。

「さ、いきましよう。」

薄暗い程度でまったく見えないわけではないが、視界が明るいと何かと助かる。

「あれって、生物兵器かな？」

「まさかあゝ！あんなウスノ口、私一人でも楽勝だったんじゃない？」

「さあ、どうだろうね。過去の失敗作とか。」

「何で今まで生きてるのさ？」

「知らないよ。」

ガヤガヤと話しながら歩みを進める。自然と、それぞれが違う方向を警戒しながら移動する面を見ると、彼らが利口だということは疑えない。

そこらじゅうに、人骨や得体の知れない生物の遺体が散らばっているが、何の不思議も感じない彼らは、敢えて口には出さなかった。

「ここで何が行われていたんだろうね……。」

「差し詰め、新生物の「創造」「じゃない？」

「神様気取りかあゝ……。なんだか同じ人間として嫌だなあゝ……。」

「さつきはヒルだったから良かったのでしたけれど、人型兵器を撃てますか？元は罪の無い人間でしたのに、なんだか可哀想……。」
みんな気にしていたことを美夜が言った。

「私は、、撃つよ。これから犯される罪の先触れじゃない？例え罪の無い人間だとしても、兵器で有っちゃいけないと思う。そしてこんなこと考えている校長先生みたいな人間も、撃たなきゃいけない。いや、本当に撃つべきはそっちだよな。」

強い口調で諒子が答える。

全員無言で頷いた。

「。。。。」

沈黙のまま、地図に従って道を進む。

大きな広場に着いた。中央には汚い水が溜まった50メートルプールがある。酷くホコリくさい。

「ここを。。。右の扉ね。」

ガチン。。。

「鍵がかかってる……。」

地図を持った輝がっかりする。

「正面の扉からでも、奥で繋がってるみたい。迂回する？」

「そっしょつか。」

「ちょっと待って！」

「どうしたの？菜緒ちゃん。」

悠が訊ねる。

「なんか泳いでる……大きいよ。」

「あれも生物兵器かな……？」

バキーン！！！！

途端に正面の扉が破壊されて、大男が入ってきた。

胸に「a-09」の鉄板が貼り付けてある。

「人型だ……。」

「大きいね……。」

「スツポンポン・・・イヤン。」

大男は進介たちを確認すると、猛スピードで走り出した。

「来るよ！」

「構えて！」

「撃て！」

パパパパパ・・・カキキキキキン！

皮下装甲で鉛球が兆弾する。もちろんダメージは受けていない。

「弾かれたあ！？」

「頭にも装甲・・・？みなさん、目を狙ってください。」

「あんなに小さいのに当たる？」

「撃ちまくれえ〜！ヒヤッホォ〜！」

悠はそう言っつて片手で撃ちはじめる。いざという時のためか、左手には手榴弾。

パパパパパパパパ・・・グチャ！

確かに目は小さい標的だが、マシンガンで、しかも5人で同じような場所を狙って撃つたのですぐに潰れた。

「グオオ・・・ゴ・・・。」

目から入った弾丸が脳まで届いたのか、大男は倒れた。 a - 09 沈黙。 チキンの疾風なんかより確実に早く殺した。

もう秒殺に近い勢い。しかし、今は武装しているからいいものの、これで街中で暴れられたら間違いなく甚大な被害が出る。

大量の血を流して痙攣を起こしている。すると急に水中から巨大な何かが飛び出してきた。 a - 09 を丸呑みにする。

「あら、大きいカエルね。」

「血の臭いで出てきたのか？」

「5メートルはありますね。うるこまであります。」

さして動揺もしない。

「撃つところか？」

「念の為ね。」

パ・・・カチン・・・

「!!!!!! 弾切れ？」

「こつちも!」

「私も。」

「俺もだ！」

「装填急いで！」

大男に殆ど使ってしまったのか、運悪く全員のマガジンが空になった。

しかし最初に残り一発だけ出てしまった物があり、巨大なカエルは敵意をむき出しに猛スピードで突っ込んできた。

「うわあ！」

「きゃ……！」

それぞれ左右に跳びなんとか突進は回避できたが、騒然とした広場に、プールから巨大カエルがまた2匹上がってきた。

「マジっすかあ……？」

「二人で一匹を迎撃しよう！」

左に避けた菜緒と進介が突進してきたカエルを引き受け、右に避けた悠と輝が組み、美夜と諒子がそれぞれ組んだ。

それぞれの戦いが始まる。

「かたまってると危ない、走るよ！」

「うん！」

悠の組が思い切り走りながら壊された扉まで移動する。片方のカエルもそちらに跳んだ。輝も悠も走りながら、弾創の装填は完了していた。

「当たれっ！」

「お願い、死んで！」

パパパパパ・・・・・・ピシシシ！

しかし予想以上に硬いウロコに体全体守られていて、クルツの9ミリパラベラム弾では体内まで弾丸が届かない。

「これじゃダメだ・・・。」

「悠ちゃん、その背中にしよってるやつ！」

悠の背中にはリボルバーランチャーがあった。中には焼夷弾が6発詰められている。

「これ？確か燃えるやつだよね！」

「そうそう！乾物にしてやるうよ！」

肩に伸縮式のストックを当てて、狙いを定める悠。

日本人には大きすぎる銃だが、この際重さなんて感じていない。カエルがこつちを向いて口を開ける。

「え？」

「何？」

次の瞬間

シュ……バチーン！！！！ドスン……

カエルの舌が8メートル先から伸びてきて二人を勢い良く弾き飛ばす。同時に壁に叩き付けられる二人。

「うぐっ！！！」

「……こんのお……！！！！！」

怒りを露に手榴弾を投げつける輝。温厚な彼女がここまで怒るのは生涯初。痛みなど忘れている。

輝の攻撃で、カエルの右前足が吹っ飛んだ。しかし気にもとめないでまた口を開け、舌を飛ばそうとしてくる。

「させないっ！」

けです。」

「うん……。」

しっかりとボウガンを構える諒子。

「いきますよ……!!!」

またもや、ガトリング砲のモーター音の後に、耳が劈けそうなくらいの発射音が響く。

ヒュイイイイン・ズダダダダダダダダダダダダダダダ!!!

同じように腕で目をかばうカエル。

冷静にそれを見つめながら、ボウガンの引き金を引く諒子。

「……喰らえ!」

スタタタン!……ザシユザシユ!

3本中、2本の猛毒の矢が命中した。

「やったあ〜!」

「……まだです。」

カエルはぐったりと突っ伏しているが、未だに呼吸は続いている。

しかし止めなどいつでも刺せる状態だ。転がっていたコンクリート

の破片を投げつけてみる。

ゴン・・・

なんの反応もない。呼吸しているだけで精一杯なのだ。

二人でカエルの頭に上った。諒子が、お尻あたりにつけていた長身両刃の西洋刀を、ウロコの間突き刺す。

「せえのお!!」

梃子の原理を利用して、西洋刀のグリップに二人で体重をかけ、ウロコを剥がした。将棋盤ほどの厚みが重々しい。

カエルは息を荒げるが、動けない。その剥がした部分にピンを抜いた手榴弾を置き、急いで頭から降り、物陰に隠れる。

チチチチチ・・・カシン・ズドーーーーーン!

ビチャ! ビシャビシャ・・・

爆発と共に硬いウロコが剥がされた頭頂部が吹き飛ぶ。脳や肉の付いた骨片が赤緑の血を纏いながら、四方八方へと放射状に飛び散った。洗面器ほどの大きな目が二人の前に転がる。

「死んだ・・・よね?」

「これで生きていたらどうでしょうね?」

「あはは！そだね、逃げよか。」

「そうですね・・・早くこんなところ逃げ出したいですね。」

「うん・・・。あ・・・こんな時になんなんだけど・・・。」

「はい？」

「お腹空いたあゝ・・・。」

「私も・・・なるべく気にしないようにしていましたが・・・。」

「目の前に大きなお肉、あるのにね。あれは食べちゃだめだよね。獲れたて新鮮なのに。」

頭部が吹き飛んで、ピクピクと痙攣を起こしているカエルを指して諒子が言った。

小型のガトリングをバツクパツクに固定しながら美夜が答える。手にクルツを持ち直している。

「無事に逃げる事ができたら、美味しいお店で奢ります。だから今は我慢しましょう。」

ク・・・クキュルル・・・

特殊部隊用ヘルメットの位置を直していた諒子のお腹が可愛く鳴っ

た。

突進してきたカエルを回避した瞬間、菜緒はド派手に尻餅をついてしまっていた。

すぐさま二人に向き直るカエル。大きな目で二人を見下ろしている。

「大丈夫！？さあ！」

菜緒を立たせようと手を差し伸べた進介の力を借りて菜緒が立ち上がる。

「いったあゝい・・・痣になっちゃうかもおゝ・・・。」

「そんなこと気にしている場合じゃないよ！来てる！」

ベタバタと這いつくばって迫り来るカエル。こんな巨体がこんなスピードで動けるのかというほど、不気味なまでの速さで近づいてきた。

「走れ！」

カエルに背を向けて反対方向に走り出す。全力疾走だ。

「どつするんですかあ？」

「今考えてる！・・・ってゆうか菜緒ちゃんも考えてよ！」

「頑張つて倒すう！」

「だからどうやってさ!？」

「頑張るんです！」

「今だって一生懸命頑張ってるよ！」

途端に、二人の間を赤い何かが目にも止まらぬ高速ですり抜けていった。それは正面のプール監視台にぶつかり、それを弾き飛ばした。その赤いものが再び二人の横をすり抜けて後方へ消えていった。

それを目で追った進介が言う。

「し・・・舌あ!？」

「舌?牛タンだったらなあ。」

「あのねえ!そんな冗談かましてる場合じゃないの!」

「冗談じゃありません!本気ですう!失礼しちゃう。」

ふと考える進介。・・・舌?口を開けるのか?ならば口を開けた瞬間に鉛弾を叩き込めば・・・。

いや、空いている時間が少なすぎて効果的なダメージは期待できないだろう。かと言って強力な弾薬兵器は、目標到達までに時間がかりすぎる。口が閉じてしまえば、強固なウロコで守られてしまう。

どうすれば・・・。

「石森先輩！目の前壁！」

「右へ曲がって！」

プールを挟んで右側では悠と輝も全力で走りながらカエルと駆け引きをしていた。

あまり近づきすぎると、あちらのカエルも相手にしないといけなくなる。

「銃撃がダメなら・・・斬撃！」

「斬撃？」

「菜緒ちゃんは背負ってるショットガン構えて！」

「これ？やったあゝ！使ってみたかったんだあゝ！」

タクティカルショットガンを右手で持つ菜緒。小型で軽量。ショットガンには珍しく照準装置が付いている。

セミオートマチックで発射毎のコッキング操作が不要なため、早いサイクルで銃撃ができる。

「俺が口を開けっ放しにしてやる！そしたら舌の付け根狙って撃ちまくって！」

「りよゝかあゝい！」

急に立ち止まって腰の日本刀に手をかける進介。その日本刀には「ひかりのかみ明守」と名前が刻まれていた。

僅かに刃を滑らせ腰を落とし、居合いの体勢を見せた。その目は開きかけられたカエルの口を捕らえている。

「開いた！」

次の瞬間、赤い舌が再びこちらに襲い掛かってきた。目をつむって思い切り振った刀が空中に弧を描く。

ザクッ！！

進介のちょうど前方50センチで、刃が太さ30センチは有ろうかという舌に空中で深々と突き刺さっていた。

いまや鈍角的にまで開いた傷口が、夥しい量の汚い血を吐き出している。

「ゲグ！ギギギギイ〜！！！」

激痛にのた打ち回り、口を閉じられないカエル。弱点が丸見えである。

激しく動き回るカエルに、なかなか弱点に照準が合わせられない菜緒。

「ここからじゃダメだあ〜……………よおしー！」

肩に銃床をしつかりと当てたまま、ジリジリとカエルとの距離を殺す。

「菜緒ちゃん！」

進介の声が聞こえているのかいないのか、カエルの前方2メートルまで接近した。

赤い舌の付け根が良く見える。それ目掛けて、引き金をしき絞った。

ズドーン……ズドーンズドーン！……ズドーンズドーンズドーン！
バチン！

太いカエルの舌も容易に千切れてしまった。千切れた舌が激しくのた打ち回っている。

同時にカエルの口から何リットルもの血が噴出し、5メートル先の床まで真っ赤に汚した。

勢い良く血を噴出したカエルは、痛みにもがきながらもプールに飛び込んで非難したが、やがて周囲の水に血を漂わせながら、沈黙と同時に水面に浮上した。

「……。」

「……また、つまらぬ物を斬ったか……。」

血を払い、パチンと音を立てて「明守」が鞘へ収められた。

「かつこつけすぎですう〜！」

「菜緒ちゃんも何かいったらいいじゃん？」

「じゃあ・・・」「大当たり!!!」「ってのはどうでしょう?」

「なにそれ？」

「分かる人には分かるんですう！」

「・・・・・・・・マニアックなんだ・・・・・・・・。」

ほぼ同時にカエルを葬り去った一同は、壊れた正面の扉の下へ集まって作戦会議を開いている。

「みなさん、ご無事で何よりです。無駄弾もあまり使わずに済んでよかったですね。」

「ああ、みんな本当に良くやったね。」

「私たちって結構強いんじゃない？」

「でも、カエルの舌・・・痛かったよお〜？」

「いつまでもここにいるわけにはいかないよねえ〜。早く次行こうよ。」

「この先からさっきの人型が入ってきたんだから、絶対に他にもいるよね。注意していかないと。」

弾薬や爆装はまだ充分にあるので、装備的な心配は無い。

「今思ったんだけどさ、この地図見る限りでは出入り口は最初にくぐった門しか無いよ。」

もしかしたら・・・脱走した「レシピ」と鉢合わせになるかもね。」

「それは好都合なのかな？」

「さあ・・・とにかく進もう？」

「各自装備の確認！実弾使用許可って校長が言ってたから、途中で武装した人間に会うかもしれないけど・・・。。。。撃ってくるよ
うならば・・・。。。。ね！」

「うん。」

「わかっています。」

「はあ〜い。」

「了解。」

「・・・撃つ！」

6 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第6話 〈交差〉

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

疾風が荒い息を吐き続ける。あの戦闘を皮切りに、数え切れないほどの人型との交戦を余儀なくされた。

進む先々で待ち構えている彼ら・・・流石に他のヴァンパイアも汗をかいている。午前1時。

「お主・・・強くなるのが早すぎるぞ？」

「はい？そんなんですか？さっきよりは相手が弱くなったんですよ。」

「いいえ、確実にあなたが力を増している・・・。」

「でも疲れます・・・。」

戦闘回数を重ねるごとに、急速に強くなっていく疾風。もはや並みのヴァンパイアを遥かに凌駕している。

初戦の苦戦が嘘のように、今では人型を素手で「殴り」「殺せるようにまで」「変化」「していた。

外見的な変化は何一つ無い。高速で移動したり、壁を走ることも難なくこなし、戦闘の熟練者のようだ。

その拳は鋼鉄を貫通し、あたったものの表面を破壊し、内側を潰す。腕を思い切り一振りすれば、前方に存在する物質は深く切れ、吐き出す唾は銃弾のように飛んでいく。

「この施設……広すぎです……はあ……。」

「聞いた話だが、ここ以外では生物兵器を作る施設がないようだ。政治家の資金には限界があるし、いくつも作るとなると人員も足りない。そこで、一つの施設に全てをつぎ込んでしまおうというわけだ。生物兵器のデータや資料はこの施設から一切外部に漏れてない。一つに集中した結果、こんなに広くなったのだな。」

「この施設……ぶっ壊せないですかね？」

「どっやって？爆薬も何も無いのよ？」

「いや、俺たちが暴れまわって……。」

「あのなあ兄ちゃん、いくらなんでもそれは無理やで？考えてみいや。もし俺らが暴れまくって建物を壊せたとしてよや。この施設にしか情報も設備もあらへんからもう生物兵器は作れへんようになるな。」

「はいはい、言いたいことは分かります。もし建物が壊れて生物兵器が外部に出たら民間人に被害がでる。」

それに……大袈裟な話だけどマスコミとかに知られたら……そ

れこそ校長が望む混乱が起きる。その他にも、………
いろいろ怖いことが……。」

「そう、なるべく表ざたにしないのが……例え私たちの責任でなくとも人間社会で生きていくためには、私たちにとってはとっても重要なことなの。」

「話中悪い……臭うで！」

「この臭いは………あいつらと違う！人間の臭いだ！」

「鼻もさつきより利くようになってきたではないか……はつきりと感じるが、今のお主は……危険なまでに強力で、底知れぬ力を持つておる。我々全員より確実に強い。」

「そんなこと……。」

「行きましょう。時間が無いですわよ」

「ここで働いている人間はみな犯罪者……死刑囚クラスだ。気にせず殺せ。」

「俺が殺していいわけじゃないですか！」

「やらぬなら、大切な友達にも逢えないぞ？いや、そいつらに殺されているかもな。」

「そんなこと……。」

「甘ったれてんじゃないわよ！お兄さん、今は時間が無いの。唯でさえ種の存続が危うい私たちを駆り立てたのは、あなたよ？大切な人は失いたくない。それは私もあなたも同じ。だから手を貸したの！あなたにもそれなりの責任って物があるわ。」

「わかりました……。」

「さあ、そろそろ来るぞ。」

いつもの癖でダガーを両手に逆手で抜き取る疾風。

「ん？お主にこれは、もう必要なかろう。素手で充分だ。」

「いや……あの……なんか安心できないってゆうか、つい癖で……。」

「好きにしたらええやん。俺らが本気で止めても、もはや兄ちゃん
は止められへんわ。」

「35人来ます……全員同じ火薬の臭い……。マシンガン何種類かと手榴弾で武装していますね。」

「はははは、もう適わんな……。一人でやってみろ。」

「え……？」

「今のお前は限界を知らない。行け。鉛弾でもヴァンパイアは死ぬが、当たらなければどうということはない。そしてお前は当たらない。」

35個の銃口が疾風目掛けて猛烈に火を吹く。

「うわ！うわわわわわ！危ないじゃないですか！当たったらどうするんですか！ってゆうか後ろにあんなにでつかいガス管ありますよ！何個か穴開いてますって！ほらガスの臭い！撃ったら引火しますって！ほら、かなりの勢いで！」

そりゃあ動き止める気で撃ってきているのだから、そんなこと考えてない。

しかし疾風にはなんとなく見えていた。「回避」を自然に体が行っている。

壁や天井にも回避しながらなので、なかなか狙いが定められない。今の彼は残像を残すほどに、病的に素早い動きをしている。

さすがに、大量に撃ち出された弾丸を全て避けきれず、右胸と右太ももに一発ずつ被弾した。

「いて！弾丸って痛い！」

普通の人間が食らったら、「痛い」「じゃすまないのだが、それを忘れている。

「やつを休めるな！撃ち続けろ！」

再び嵐のように弾丸が襲ってくる。

「ガス出てるってのにお構いなしかよ、コンチキショー！！！！！」

もっと充滿してから銃でも撃とうものなら、確実にぶっ飛んでしま
う。

「くそ！時間が無い！……やるしかない！」

弾丸が大して効果が無いことを悟った疾風は、あえてその嵐の中に
飛び込む。

先ほどよりも痛くない。この瞬間でさえ「変化」が続いている
のだ。

……心も変化を始める……

「……死ぬ……っ！」

自分で呟いた言葉に自分で驚く。こんなことを言う人間じゃなかつ
たはずだと自問自答をする。

その間も、集中砲火の中を普通に歩いていった。

「ダメです！止まりません！」

「黙れ！もっと撃てえええい！」

「……これで……終わりだ！」

疾風の叫び声で時が一瞬止まる。

・・・部隊がいる通路の中央を一陣の風が通り抜けた・・・

再び時が動きだした瞬間には、疾風は部隊の後ろでポケットに手をつつこんで立っていた。

それは刹那の業。一瞬にして喉を前の隊員から切り裂き、決着をつけたのだった。全員、自分が死んだことに気づかずに、立ったままだ。

「弱い・・・いやいや、俺は何を言ってるんだ！」

後ろから声がする。

「さすがだな。」

「褒めてあげなきゃいけないところでしょうけど、先を急ぎましょう。」

「！！！！！！！！また人間の臭い！！！！！！友達のです！！！！！！武装してる！？！？！？！！！！！！」

「遠いか？」

「かなり・・・それと、生物兵器の臭いも・・・。」

「急ごう!?!」

「……もう迷いはしない……」

旧生物兵器保管庫から新生物兵器保管庫まで歩を進めた一同は、新旧混じった生物兵器に遭遇していた。

「前に人型3体!!近いよ!!」

「悠さん!狩崎さん!後ろ警戒お願い!

「人型……迎撃します……」

「左からでつかい猫!速いよ!」

「まっかせてえ!」

「悠ちゃん、その大きいのを貸して?」

「はい、あと5回撃てるよ!」

「諒子ちゃんは猫迎撃の援護にまわって!」

「はい!」

「食らええええええ!」

「当たってえ!!」

「これ、全部使っていい?」

「気にしないでやっちゃえやっちゃえ!」

「人型2体沈黙しました・・・弾切れです。武器交換するまでもう
一体お願いします。」

「私が引き受けるよ!」

「猫沈黙!上からでっかいハエ!」

「速くて当たらない!菜緒ちゃん、ショットガン!」

「よっしゃきたあゝ!喰らえ喰らえ喰らえええええ!!」

「輝ちゃん、この武器背中の借りるね!」

「了解!あ、手榴弾ある?」

「はい!これ!」

「ハエ全滅うゝ!ショットガンの弾も全滅うゝ・・・!」

「マシンガン使って!」

「人型沈黙!・・・その後ろからさらに4体!」

「外すなよお……今だ!!」

「飛んでけえ!……わ、弾けとんだ!」

「そろそろ弾薬切れるよ?」

「みんな!撃ちながらあの扉まで走ってえ!」

「了解!」

「行け!ゴーゴーゴー!……!!」

「うわあ……!!人型走ってくるよお!!」

「これでも喰らえ!……よし!足吹っ飛んだ!」

「美夜ちゃん!早く扉に入って!」

「はい……。」

ギギギイイ~~~~~ボタン!ガチン!

大きな鉄の門をかける。

「はあ……。」

「あんなにいたとはビックリ!」

「どうする?私、弾ないよ?」

「私もない。」

「悠も……。」

「同じです……。」

「今あるのは……これだけ？」

「ベレッタ1挺に……手榴弾……各自、日本刀に西洋刀にダガー……槍……これでどうしろってんだ……？」

「みんな！目の前に人型1体！」

すかさず手榴弾を投げつける輝！みんなでライトで照らしたため、暗闇ながらはつきり視認される。

「……死んで！」

ズドン……ドタツ……

空中で爆発した手榴弾で首がもぎ取れた。中から、躍動する筋肉と背骨に守られた延髄や神経がはみ出してくる。

体や頭自体は金属で守られているので、さほど変わってない。

「はぁ……もう……。」

「もうすぐ出口だよ、元気だそう！」

「うん……。」

「出られるかな？」

「ココまで来れたのですから・・・絶対に出られます。」

「しっ！・・・誰か来る・・・。」

目の前に4つの人型の影が現れた・・・。

「人型か・・・終わりだな・・・。」

悠が小さく口を開く。

「・・・は・・・やて？」

「は？今なんて言ったの？」

「疾風・・・疾風だよ！」

「悠さん・・・先輩の死を認めたくないのは私も同じですが・・・
！！！！！先輩！？！？！？！？」

一同が4つの影にライトを向ける・・・。

みんなビククリして声にもならない。啞然としている。

「そう！俺だよみんな！生きていて良かったあゝ・・・怪我
してない？」

「平丘君！？生きてたの！？」

目を真ん丸にして幽霊でも見たか、という表情の輝。

「せえんぱあゝい．．．死んじゃったと思ってたんですよ．．．？」

涙目で可愛く訴える菜緒。

「．丘．．先．輩．．うして．．研究員が．．死ん．．
つて．．．．．。」

あまりの驚きに、言葉も発せない諒子。

「．．．．．つく！．．うう．．．．うわあああゝん
！！！！先輩！！生きてたよおゝ．．！！良かったよお．．
！！！！」

大声で泣き出す美夜。言葉遣いまで変わってしまったている。

「まあ、もともとあなたなんか殺しても死ぬような人間じゃなかったしね．．．．．。死んだって聞いて諦めついたけど、また会えてラッキーな感じかな？」

幼馴染という間柄のせいか、素直になれない悠。しかし、気持ちは十分疾風に伝わった。

「平丘君．．．．．。」

名前しか呼ばない進介。もはやなにも言うべきことは存在せず・・・
伝えるべきことは言葉に存在しない。

ここまで6人がたどり着けたのは、言うまでもなく進介の活躍のおかげだ。

「石森君・・・いろいろ世話かけちまったな！」

「いや、生きていて何よりだよ・・・。」

「お取り込み中悪いが、我々の仲間も待っているのね・・・。」

これから雰囲気盛り上がりそうかというところでぶち壊される。

その姿を見て悠が問う。

「ヴァンパイア・・・本物？」

「疑うとは失礼な！由緒正しきヴァンパイア一族のヴェラム家の血を引くものぞ！」

「ひゃあ！ごめんなさいい・・・。」

「まあまあ、相手はかわええお譲ちゃんでんがな。怒らんといてえや。」

「お・・・大阪弁？」

菜緒が悠と同じように言う。

「ちやう！俺は広島や！広島弁や！」

「うわあ！ごめんなさい！」

「あらあら、あなたも怒ってるじゃない？」

「うわあ〜・・・綺麗な女の人お〜・・・。」

「なにを言うの！私はニューハーフのヴァンパイアよ！」

「ぎゃあ！・・・・・・・・不覚・・・・・・・・でも・・・・・・・・いいかもお〜・・・・・・・・。」

進介が壊れた。

「この人達、一緒に君たちを探してくれたんだ。本当は他の脱出計画があっただけど・・・無理言っ来てもらった。」

「無理など言っておらぬ。ヴァンパイアは仲間を大切にするものだからお主がヴァンパイアである以上、ヴァンパイア同士ということだな。あの場にいたらどのヴァンパイアもこうしておる。」

「ちょっと待って！平丘先輩、ヴァンパイアだったの！？」

諒子が一同を代表するように訊ねた。

「なんか・・・・・・・・ご先祖様がヴァンパイア・・・・。」

「言われてみれば・・・・・・・・そう見えなくもないですね。」

「まあ、時間がないんや。とっとと脱出して車の中で話そうや。」

「車あ？どこにあるのお〜？」

「建物の外で待機してるはずよ。」

「もともと、今日は脱出計画の日だったからな。」

「ほな、急ぎましょか。」

「同は地図を下に出口へ向かう。」

「………終焉へと近づく………しかしそこでは」「疾すぎる終焉」が少年を捉えていた………。

7 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第7話 　　～闇夜～

一同の再会の場と出口はそう遠くなかった。走って4分の距離。今では逃亡者と生物兵器は入り乱れて戦っている。

「お譲ちゃんたちはここにかくれときいや。化け物押しつけて道作るさかい、まっとれ。」

ゲートはとつくに大きな口を開けて待っている。

メガネの黒魔術師が団を視認し、ゲートの下から声を張り上げる。

「ずいぶん遅かったですねえ！早く逃げましょう！車はもう来ていますよ！」

「すまぬ、合流に時間がかかってな！」

「さあ、最後ですわね。やりましょう！」

「最後やて。よかったなあ兄ちゃん？」

「……こんなこと……本当に最後にしないといけない。」

またもやダガーを両手に逆手で装備する疾風を見て男が鼻で笑った。

「ゆくぞ!!」

掛け声と同時に分散し、各個戦闘を開始する。

そこらじゅうに人型の死体が転がっている。やはり「伝説の怪物」
「だけあってそれぞれ強力な能力を持っている。」

しかし数的には20対2000といったところで、こちら側には疲れも見え始めている。

「26・・・27・・・28・29・30!!!」

開始10秒で疾風は30体を沈黙させていた。

「我輩も負けていられんな・・・。。数も数だし・・・。。
いたしかたない・・・。。」

生命に通う森羅万象の盟友たちよ、今こそ血の結束の名において服従を示せ・・・!!!!!!

Bloody Extinction !!!!!!!

一瞬の赤い闇が訪れ、やがて晴れる。闇に包まれていた直径20メートルの範囲に入っていた人型の体内から、血液が一滴残らず消滅し、干からびた肉体のみがそこにはあった。

「そんなことできるなら、初めから使ってください!」

「これを使うと疲れる……。」

いきなりクタクタになって座り込む男。その間にも、どんどん人型が増えていく。

「マズイ……多すぎる！」

狼男が叫んだ。

「早いとこ道作って、人間のお嬢さんたち助けようぜ！こちとらへ口へ口だ！」

そういいながらも、何時間も戦い続けている。かなりのタフガイだ。

「円陣防御で移動しましょう！」

「オーケイ、それでいこう！」

「手伝うわ！」

「俺も行くでえ！」

「自分も加わります！早く終わらせましょう！」

こうして、狼男2人とヴァンパイア2人、それに疾風が加わって人型の中を人間を守りながら移動することになった。

他の脱走者は、人型の増加をとめるので手一杯だった。

「おし！みんな逸れんなよ！」

「円陣防御を組んでいるといっても、俺たちは速い！全力で走って
いけ！」

「さあ、今！」

人間を中心にして怪物たちが外を向いて戦っている。しかしより増
加した人型におされ気味である。

「くっそ・・・なかなか減らない！」

「おい人間！大丈夫か？」

「はい、付いていくのが精一杯で・・・。」

「それでいい」

「私も・・・使っしかないか・・・。」

「何を？」

「ふふふ・・・秘密。」

そういつて、ヴァンパイアの一人が空中に飛び出した。

「古の霸王の血を継ぐ者の名において我、汝に命ず。我のゆく手を
阻む愚かなる汚れた生命に裁きの鉄槌を下せ！」

.....Judicial Decision「！」

途端にそのヴァンパイアの両腕に赤い雷が宿った。

「さあ、人間の愚行はおしまい！消えなさい！」

床一面に雷が降り注ぐ。その空間にいる人型は、激しく痙攣しながら次々と絶命していく。

「す……すげえ……。」

「さあ！今のうちに！」

死体の山を一気に駆け抜け、ゲートの直ぐ前に止まっている車に乗り込む。

そこに校長とフリクが現れた。

「あ！あの人達……！」

「校長……。」

「やあ、みんな元気かね？念のために「回収班」を要請してよかったですよ……。」

「どうゆづことですか？」

「いや、折角の研究をココで失うのはとても惜しい。よって、最小

限のデータと資料だけでもとっておこうとおもってな。」

「また・・・同じ物が作られてしまつた・・・？そんなの、絶対にダメだよお！」

笑っていた校長の表情が急変する。

「五月蠅い小娘！貴様らのせいで大損害だわ！気に入らん！」

そういつて懐からデザートイーグルを取り出す。

しかしそれと同時に、素早く取り出された進介のベレッタが、校長の眉間目掛けて火を吹いた。額に一円玉ほどの穴が開き、そのまま後ろに倒れた。

「校長・・・いや、田中光男・・・沈黙。」

「・・・さあ、行くぜ！」

他の車はもう道路に出ている。

「俺は・・・残る！」

「は？何いつてんの疾風！逃げるんだよ！一緒に逃げようよ！」

「そおだよせんぱい！せつかく脱出できたじゃん！」

「・・・行くんですね・・・。。。」

美夜が静かに呟く。どうやら疾風の心中を悟ったようだ。

「狼のおっさん！車出してくれ！」

「……わかった……お前はいいやつだよ」

「え？さっぱり意味わかんないんだけど？」

「説明は後で……浅木さんが狼のおっさんがしてくれるよ……」

「
そういつて車を降りる。」

「………じゃあね、「」また会おう！………」

返事を待たないうちに途端に車のスクイール音が響き、疾風と友人たちを引き裂いた。

9 s t a g e

H a e m a t o p h i l i a V a m p i r e S t o r y

第8話　〜終焉〜

深夜3時、公道を走る車の中で、悠達が美夜と狼男に問い詰めている。

「ねえ、戻ろうよ！疾風置いていけない！」

「なんで平丘君は乗らなかつたんだ・・・？」

「止めてよぉ〜！なんで乗せていかないのぉ〜？納得できないよぉ〜！！！」

「今は逃げるのが先なんだ。運転に集中できないじゃないか！」

「そんなことどうだっていいよ！説明して！」

ずっと暗い表情をして涙目になっていた美夜が口を開く。

「・・・私が・・・説明します・・・。」

「美夜ちゃん、大丈夫？なんか顔色悪い・・・平気？」

「ええ・・・、皆さんよく聞いてください・・・。先輩は・・・。」

「先輩は・・・なに？」

「・・・死にます。」

「は？」

「自殺する気です・・・。」

「はぁ？」

「あそこに残ったら、いずれは体力の限界で死ぬんじゃない？でも、なんで残ったの？」

「・・・体力の限界とかじゃなく・・・どうやって死ぬつもりかは分かりませんが・・・。」

校長先生が言っていた回収班が来てしまったら、データの詰まったコンピュータや何体のサンプルを持ち帰って、再び研究を再開します。」

「じゃあ、回収班と戦えばいいじゃない？」

「ダメです・・・。時間がなさ過ぎます・・・。皆さんは気づいていなかったと思いますが、先輩の肋骨が心臓に刺さっています。痛みを訴えなかったのは、ヴァンパイアとして痛みに耐性がついたこ

とと、戦闘の連続でアドレナリンが異常に分泌されていたんでしょ。う。」

「じゃあ尚更一緒に逃げないとダメだよ！」

「先輩は・・・もう助かりません。殆ど心臓が動いてないんです。」

「さっきはあんなに元気だったじゃん！」

「筋肉と意思だけが無理やり先輩の体を動かしていたのです。」

狼男が運転席から口をはさんだ。

「覚醒しきるには時間が足りなすぎたんだ。普通は2時間で覚醒が開始し、7日かけて変化を続ける。ついさっきまで人間だったんだ。いきなり無理をしすぎた。」

「でも！だからってあそこで死ぬことないじゃないか！」

「だからこそ・・・僅かな命、最後に使い切るのでしょう。あの施設の全壊は無理でしょうが、残りの命と引き換えにコンピュータやサンプルだけは何としても破壊しようとする・・・。」

「そんな！気づいてたんだったらなんで止めなかったんだよ！」

進介が美夜の両肩に掴み掛かる。

「やめてください！止められるものなら止めていましたよ！」

「じゃあなんで・・・!!!!！」

「あの人・・・一度決めたら聞かないから・・・誰が何を言っても・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・確かにね。」

悠が諦めたようにつぶやいた。幼馴染の悠や元恋人の美夜はに分かっていた。

静まり返る車内・・・エンジン音だけが乾ききった喉で叫んでいるように響いている。

「・・・もう今更どうしようもないってことか・・・。」

工場ので出入り口で疾風が一人立っている。辺りからは気持ち悪いほどに温まった風が吹き込んでいた。

「さあて・・・そろそろ苦しくなってきたことだし・・・・・・・・さっさと終わらせないと。」

両手に握り締めたダガーを見つめ、考える。

「いくらなんでもこれ（ダガー）じゃ・・・無理だよな。」

コンピューターやサンプルは工場のおちらこちらに点在している。

時間も手段も残されていない。自分の心臓に突き刺さっている肋骨を、軽く抑えながら呟く。

「これさえなければね・・・生きてここから出られるんだけどなあ・・・。一度はここで死んだ身、所詮死に場所は変わらないってか。」

そう言いながらも通る通路の先々で、コンピューターやサンプルの入った巨大試験管を破壊していく。

地図を見る限りでは、建物の中枢に行くにしたがってコンピューターも実験室の数も増していく。

「これじゃ間に合わないよなあ。逃げればよかった。」

「お兄ちゃん？」

「ん!？」

不意に背後から声をかけられた。そこには疾風のダガーを握り締め、人魚の少女が立っていた。

「あれ？逃げ遅れたの？」

「ううん、お兄ちゃんを待ってたの。絶対ここに来るって思って」

「なんで？」

「わかんないけど・・・なんとなく。」

あどけない笑顔で人魚の少女が笑う。

「逃げないの・・・？」

「うん。私は生き過ぎたの。これでも480年は生きているのよ？」

「うわ！めっちゃ先輩じゃん！今まで失礼しました。」

「いいのよ。人魚は生まれる前に成長する限界が決まっているんだって。私は生まれて12年で止まっちゃったの。体だけじゃなくて、心も成長しないんだって。」

ここまでではつきり言われると、「生きること」「を押し付けるわけにはいかない。」

「そうなのか・・・なんか哀しい。」

「で、私を殺せるのは今はお兄ちゃんしかいない。殺して？」

「ごめん、今はちょっと忙しいんだ。」

ツンと鼻につく匂いに疾風が気づく。

「ガス・・・？ガスだ！」

「どつかしたの？」

「走るよ！」

「ちよつと・・・キャッ！」

少女を抱きかかえ、疾風はガスの匂いのする方角へひたすら走った。いくつもの階段を跳び、いくつもの廊下を駆け、いくつもの角を曲がった。

ガスの匂いが強まってきたころ、先ほど見た景色を目にする。このあたりはガスが充満しきっているらしく、研究室に有ったガスマスクを疾風も少女も着用している。

その空間には、35体の人間の死体が転がっていた。

「・・・ここは、さっきの・・・。」

疾風と特殊部隊が戦闘をした施設中枢の巨大通路。銃弾で3つ穴が開いた巨大ガス管が、激しく可燃性ガスを噴出している。

地図によると、地下にはかなり大型のガスタンクが埋蔵されているらしい。地上にはかなりガスが充満してきていた。

「ここに残ったのも、無駄じゃなかったな。」

「お兄ちゃん、どおするの？」

「こいつを爆発させる。」

「……本当にいいの？私は死ぬ気だけど、お兄ちゃんまだ若いのにね。」

見た目も精神年齢も自分より低い480歳の少女に言われるとなんだか変な気がする。

「そりゃあ……これっぽっちも死にたくないよ。正直なところ、誰かが代わってくれるならこんなところ早く逃げ出したいね。」

「私が代わるうか？」

「いや、どうせ俺は直ぐ死ぬんだし、どうにもならないさ。」

「なんか、哀しいね。永遠に生きられる私が死にたくて、生きたいお兄ちゃんが生きられないなんて。」

「生き物である以上、死の拘束からは逃れられないのかも。永遠に生きられるキミでも、こうして終わりを迎えるんだ。」

「もつと生きたい？未来が欲しい？」

「無い物ほど欲しがるのは人間の悪い癖だね。未来が欲しいよ。たいたした夢もお金もないけど……。」

「けど……？」

あいつらみたいなやつが……仲間がいるから……

と言いつつになり、赤面して口を開いた。

「いや、なんでもないさ。こんなこと言うのは俺のガラじゃない」

「そう……。」

相変わらずガスが激しく噴出し続けている。施設全館に充滿してきたところだろう。

「そろそろ……かな。」

「いつでもいいよ。」

そう言つて、疾風の左手を握る人魚の少女。微笑みかける疾風。

「最後までこいつに頼ることになるとはね……。」

そう言つて、腰元の装飾された最後の一本のダガーを右手で抜き取る。他のダガーは戦闘で折れたり、紛失したりしていた。

最後に残ったのは、祖父が西欧の古い友人から譲り受けた妖刃。妙に長く、刺激的なまでに全てが鋭利に模られていた。

その殺人的な刃はうつすらと青黒いオーラをまとい、氷点下を思わせる手触りを纏う。

「綺麗な刃……これで……どうするの？」

「金属同士を早く擦り付ければ火花が散る。ちょっとだけなんだけどね。でも、これだけガスが充滿していたら、一発だよ。」

「そうなの……。」

しばらく沈黙。

「もっとお兄ちゃんとお話していたかったなあ。」

「俺も……、でも、早くしないと。」

「私はいつでもいいよ。」

握った手に力がこもる。

「なんの躊躇もない、いくよ?。」

「うん。」

「……天国で会おう!。」

激しくダガーをガス管に叩き付ける。小さな火花と共にガスに引火し、周囲が白い光に包まれる。

……一瞬で弾け跳ぶ施設……施設内は白一色……それ以外の存在は……全て拒絶される……。

静まり返った車内が悠の声に切り裂かれる。

「ねえ！工場！」

「あ……！」

「爆発してる……。」

「やっぱり、なんとなく分かってましたけどね。派手なのが好きな人でしたから……。」

「もう会えないんだよね……本当に会えないんだよね？」

「会えたら……どうする？」

「とりあえず泣く……かな。」

「そっいいながら、諒子ちゃん泣いてるじゃん……。」

「狩崎先輩だって……。」

「もういいよ……。」

「バイバイ疾風……。」

「」「また会おう」「……。」

「きつと会えるよね？」

「会えるよ、だけど会うのはまだまだ先さ」

光に包まれる工場を見ながら、進介が呟いた。

「この事件、新聞とかに出るかな？」

「爆発自体は出るだろうねえ……でも、中で何やってたかは……」

「私たちが新聞社に訴える？」

「誰が信じるの？」

「他のヴァンパイアや狼さんたちだって訴えてくれるよ！」

「そんなことしたら、彼らが暮らせなくなる……。」

「じゃあどうするの!？」

「俺たちにはどうしようもないさ」

「……私たちみたいに、今までこうゆうことあったのかな？」

「あつただろうねえ……、表には絶対出ないようにして。」

「どうしようもできないなんて、哀しい……。」

……日の出前の山に向かって車は進む……日光から逃げるよう

に
・
・
・
。

Final stage

Haematophilia Vampire Story

最終話 ～神の田園～

瓦礫の山・・・突き出た鉄・・・コンクリートの破片・・・黒く
小さくなったガラス・・・

砕けた骨・・・変形したプラスチック・・・煮え滾る液体・・・飛
び散ったタンパク質・・・

全てが原型を留めていない破片の山の中、たった一つだけが全身を
保っていた。

「・・・いつてえ・・・。」

少年は仰向けで倒れていた。

「・・・ハア？なんでいてえんだよ・・・、くっそ・・・全身が動
かない・・・。」

隣に少女はいない。

「無事に逝けたのか・・・よかつたな。しかし何で生きてんだ？」

自分の肩から生える、大きく黒い翼に包まれていることに気づく。
もちろん全身ポロポロだ。

「はあ、どおりで生きてたわけねえ・・・ご先祖様、どんだけ強いヴァンパイアだったんだよ。う・・・よいしょっと！ああ〜イタイ！」

痛みを堪え、身を起こす。未だに握っていたダガーをベルトに無造作に差し込む。

「うう~~~~ん、痛いなあ・・・どうでもいいや。」

徐々に太陽が山の端から光を漏らす。綺麗な景色が疾風の目に映った。

「そついやあ、ヴァンパイアって太陽に当たったら灰になるんだよな？当たっても死なない奴もいるんだっけ？俺はどっち・・・いや、どっちでもいいや」

徐々に昇る太陽に向かい、目を見開く。陽光が疾風の目を貫き、全身を包み込んだ。

「太陽、眩しいなあ・・・こんなに暖かかったっけ・・・？」

少しづつ、疾風の体が指先や体の先端から光の粉となって宙に舞い上がっていく。

「太くて短い指、なんだかんだ言っても俺の一部だったよな・・・」

器用に動いてくれたし。サラサラの髪の毛も自慢だったのに……
もったいねえな……。」

山の端から完全に出た太陽が、完全な円を模った瞬間、一気に疾風の体が光に包まれた。

「この顔……消えるのか……。生まれ変わるなら、もっと美形にしてくれよな、神様！」

最後の冗談の後に、目を閉じる……。2秒ほど経ったか。ゆっくり目を開け、太陽を睨んだ。

「やっぱりあなたには、敵わないぜ……。」

全身がさらに激しく光り、より一層輝きを増す。陽光と共鳴するかのように……。

次の瞬間、粒子の細かい光の粒になって一気に弾け跳んだ。

……腰にしていたダガーが……宙から落ちて地面に突き刺さる。

．．．深々と．．．

．．．存在していたものが．．．存在していた証拠に．．．存在を
残していった．．．

．．．その残された存在に許されたのは．．．一時的な思念の勾留．
．．．

．．．少年の想いが．．．少しの間．．．存在を許された．．．

「「「死んだかあ．．．まあ、それもアリかな。悪くない気分だ。
天国とか地獄つてあるのかなあ．．．」」」

「「「また、みんなに会えるよな．．．死んでも、思うことはでき
るんだ．．．」」」

「「「あ．．．迎えが来た．．．あつたけえ〜．．．彼女に抱かれ
てみたいだ．．．」」」

「少し……疲れました……しばらく……眠ります……」

「……みんな……」

「……また会おう!」

「……突き刺さったダガーが……」

「……哀しみに満ちた希望を抱いて……」

「……陽光を激しく反射し続けていた……」

H a e m a t o p h i l i a V a n p i r e S t o r y
あとがき

結末もストーリーも考えないで書きました。

いきあたりばったりなストーリーです。

タイピングが遅くミスも多い自分ですが、なんとか書きあがってひと段落。

コーヒー片手に暇つぶしに読んで頂けたら幸いです。

もっと長い物語を書きたいのですが、時間やスキルの都合上、どうにもこうにも……。

高校生なので勉強も疎かにできないのが辛いです。

最後まで読んでくださった読者(?)の皆さん、ありがとうございました。

b y H a y a t e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1948a/>

Haematophilia Vampire Story 1stage

2010年10月15日09時16分発行